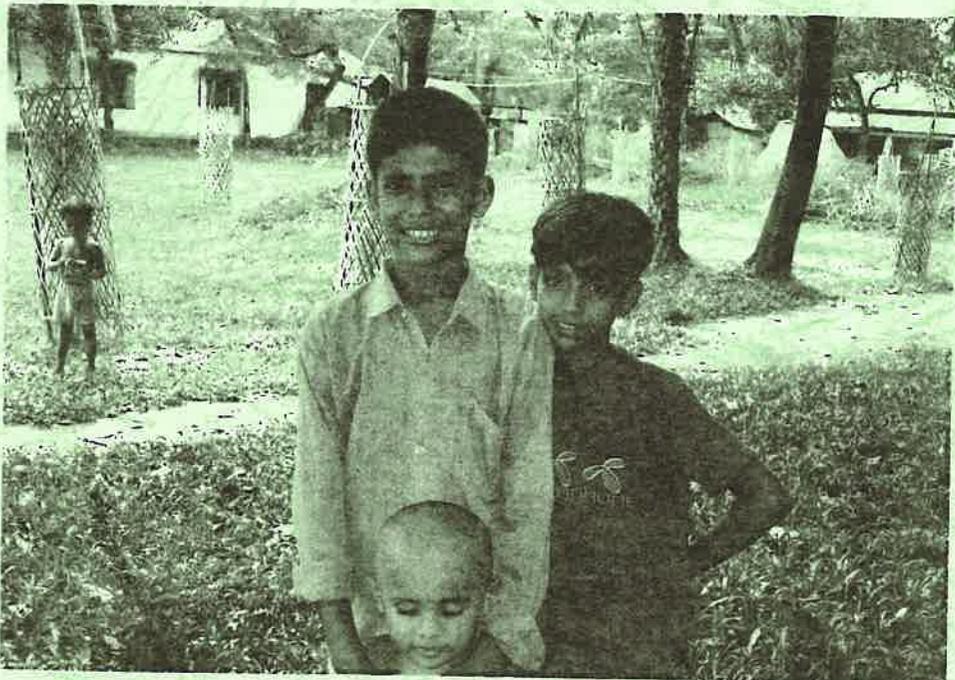


第33回 ACEF バングラデシュ スタディーツアー



2007年 8月2日～17日

第 33 回
ACEF STUDY TOUR 報告書
～目次～

- ・ スケジュール
- ・ **Bangladesh の概要と BDP について**
 - ・ **メンバー紹介**
 - ・ **BDP スタッフ紹介**
 - ・ **学校訪問**
 - プーバイル地区
 - ダッカ地区
 - マザー・テレサの施設
 - 職業訓練学校
 - プーバイル・カレッジ
 - ・ **ホームステイ**
- ・ **BDP スクール先生方との日本食パーティ**
 - ・ **Culture Show**
 - ・ **国立博物館見学**
 - ・ **独立記念塔見学**
- ・ **BDP スクール卒業生との交流会**
 - ・ **教会とボートとリップ**
 - ・ **BDP スタッフのお宅訪問**
- ・ **Bangladesh の日常生活について**
 - ・ **メンバーの感想文**
 - ・ **参加者名簿**

第33回(2007年夏)ACEFスタディーツアー日程

- 8月2日(木) マレーシア航空にて成田発、クアラルンプール乗り換え
- 3日(金) AM 未明にダッカ空港着、開会礼拝の後オリエンテーション
PM ポートトリップ、カトリック教会見学、女子寮での交流
- 4日(土) AM ダッカ・スラム地区BDP寺子屋訪問、ニューマーケットで買い物
PM BDP寺子屋卒業の大学生13名と交流
- 5日(日) AM バドゥンカトリック教会礼拝出席、ボダハルバイド校、ショモシン校訪問
PM プーバイル、ミレル市場散策
- 6日(月) AM BDP職業訓練校訪問、バシャニエ校訪問
PM バシャニエ校で昼食後カルチャーショー、今後の全体スケジュール変更を決定
- 7日(火) AM チャムツダ校、ボシュガオン校訪問
PM 大きな川に架かる橋の上でひととき
- 8日(水) AM 国立博物館見学、日本食材購入班と見舞班に分かれる
PM フリータイム
- 9日(木) AM マグドゥビ高校訪問
PM マザーテレサ・アシュラム訪問、ヘモントさん実家訪問
- 10日(金) AM BDP先生方と日本食、ベンガル食パーティー
PM 先生方の家庭に2名ずつホームステイ
- 11日(土) AM フリータイム
PM エリックさん宅訪問、村を散策
- 12日(日) AM シャバ・カトリック教会礼拝出席、プロカシュさん宅訪問、独立記念塔見学
PM オモルさん宅訪問
- 13日(月) AM ナラヤンクール校、プーバイル校訪問
PM ラハジさん宅訪問、列車見学
- 14日(火) AM プーバイル・カレッジ訪問
PM サイフルさん宅訪問、市場散策
- 15日(水) AM ロッコンティア校、バニアバリ校訪問
PM BDP小学生とのカルチャーショー
- 16日(木) AM 荷物整理、部屋の掃除
PM 最後のシェアリング、閉会礼拝、夜ダッカ空港へ出発
- 17日(金) AM 未明ダッカ発、クアラルンプール乗り継ぎ
PM 成田空港着、解散

アジアキリスト教教育基金（ACEF）とは・・・

1971年に独立したバングラデシュは、アジアで最貧国といわれ、人々は絶対的貧困にあえいでいました。当時、同国における識字率は、約30%であり、特に女子に対する教育は軽視されがちでした。農村など貧しい地域においては、女子は14～15歳で口減らしのために嫁がされ、それが世界一の人口密度かつ人口増加率の一因ともなっていました。

長い間、女医として地域医療に従事してきたDr. ミナ・マラカール女史は、保健、衛生教育その他すべての地域活動の根底に「基礎初等教育」がなければならないことを痛感し、「すべての子供に読み書きを」を念頭に、1990年5月、ダッカ市南部のスラム地域において寺子屋運動を開始し、それを、「サンフラワー教育計画＝Sunflower Education Project＝S.E.P.」と名づけました。家庭が貧しく、中学校に進めない女子学生に奨学金を与え、先生となってもらい、小学校入学前の子どもを集めて「寺子屋幼稚園」を始めました。このマラカール女史よりの呼びかけに応じて、アジアキリスト教教育基金（ACEF＝エイセフ）は、バングラデシュの子どもたちに「寺子屋を贈ろう」と1990年10月に発足したのです。マラカール氏が始めた運動は、SEPとACEFの相互協力関係のもとで拡大し、翌年にはダッカ郊外のガジプール県プーバイル地区、やがて、南部農村地帯のポリシャル県カティラ地区、北部農村のジャマルプール県ジャマルプール地区、ボクシガンジ地区、ネトロコナ県ネトロコナ地区にまで広がっていきました。それから約10年を経過し、1999年6月、SEPは、政府からNGOとして正式の認可を受けました。この新たな出発にあたり名称を新たにSEPからBDP（Basic Development Partners）に変更しました。“Basic”は教育をはじめ開発・発展の基礎となるものを求める、“Development”は初等教育を中心としつつ、その周辺にある課題と取り組みつつ発展を考えてゆきたい、“Partners”はACEFとの関係は、援助する側、される側という関係ではなく、共にPartner, Co-Worker（共働者）として共通の目標に向かって共に働いているのであり、その関係は、BDPと住民とのパートナーシップともなっていることを意味しています。

2007年現在、生徒数は11928名、教師数は292名、学校数は73校となり、寺子屋幼稚園、寺子屋小学校だけでなく、小学校卒業生のための職業訓練学校も開校し、バングラデシュの教育による更なる発展を目指しています。

メンバー紹介 ☆人チーム☆



中川 英明
Japanese Boss! 見た目はワイルド! 見た目はワイルド! けど中身はソフト◎いろんな引き出しを持っています。



山口 旬
 ヤマジユン。子どもの心をつかむのが得意な小学校の先生。料理も得意☆



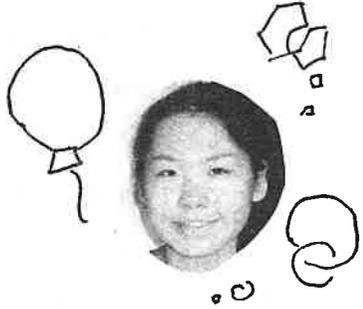
佐々木 治菜
 はるなさん。美人だけど気さくな人で、弱っている人をすかさず助けてくれる姉御肌です。



関口 萌
 ほんわか空気のモエさん♪人の失敗も余裕でゆるしてくれるとっても優しい人。



渡邊 さかえ
 さかえの明るさでくさかえの笑わしてで場所を盛りと貴重な存在です。



阿部 遥
 はるか一番の脱力系。天然だけど結構中身はしっかりしているんです。



寺田 来未
 クルクル。誰にでもフレンドリー♪サロワカミュージズの着こなして右に出るものはいません。



木村 鴻介
 コウスケ。子ども大好きな津軽弁のイケメンボーイ☆おいしいところをさらっていきます。



村本 千尋
 ちひろのほんわか笑顔には誰も敵いません。ちひろの微笑にみんな癒されました。

♪



井上 儀子
どんな大変なこと
ものりこさんがニコ
ニコしてれば大丈夫
夫！頼れるバンダラ
デシュ・マスター☆

Bazar!



高崎 和子
いつも誰も見ない
いようなくとるを力
いてくれる、優しい相
コさん。役です。

♪



塚本 潤一
ツカジュン。歌いま
くり！躍りまくり！ま
喋りまくり！で常に
みんなを楽しませてな
くれる、おちゃめな
牧師さん。



斉藤 修三
シュウさん。こんな
先生いたらいいな、
という感じの先生♪
いつも人の話を熱心
に聞いてくれます。



I Love
Kobe

徳田 有希子
とくちゃんのパワフ
ルさは周りを元気に
します。スタッフに
ベンガル語を教えて
もらうガンバリやさん



面川 麻理
国際協力について人
一倍考えているマ
リ。プロ級のピアノ
でどんなリクエスト
にも応えてくれます。



大久保 恵瀬
やっちゃん。ピュアで
優しい歌姫。その反面
「ソーラン節」を豪快
に踊る男前な一面も
☆



中込 久美子
クミコ。2007年度健
康大賞受賞。メンバ
ー内最強の最年少。
唯一の弱点は写真を
撮られること♪

Bチームの
ゆかいな
仲間たち



Saiful(サイフル)さん：
ラブ・ソング好き
人におごるのも大好き。
なんとプロモーションビデオにも
出演していた多才ぶり。

BDP 以外にも数々の仕事をこなす
ビジネスマン。
職業訓練校コンピュータ担当

Prokas(プロカッシュ)さん：
2000年～、職業訓練校配線担当。

笑うと「ウツシッシ」。大きくうなすく姿が印象的。
誰かが苦しむと歌も唄えない位、深く悲しむ優しさ。
新婚ほよほよなんだけど、
Pubail オフィスに単身赴任が
ちょっとツライ!?



ラハジさん：プーバイルの学校の監督。
大人しく見えるけど本当は話すのが大好き。
歌・けん玉・バイク遊びも大好き。



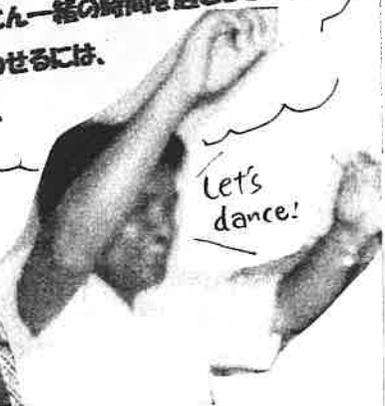
fish face

オムルさん：プーバイルの学校の監督。
表情豊かでひょうきん、愛嬌たっぷり☆
「ありがとありがと〜♪」から
「みなさん、ごはんですっ」までオムルワールド。
魚の変顔もお手のもの!

Thank you very much !!
BDP スタッフ !!

「とことんじっくりPubail A と Z」だった今回は、
Pubail スタッフとじっくりとことん一緒に時間を過ごしました☆
そして、私たちが心を通い合わせるには、
1つの歌があれば十分でした。

日本語
反カ強中



Let's
dance!



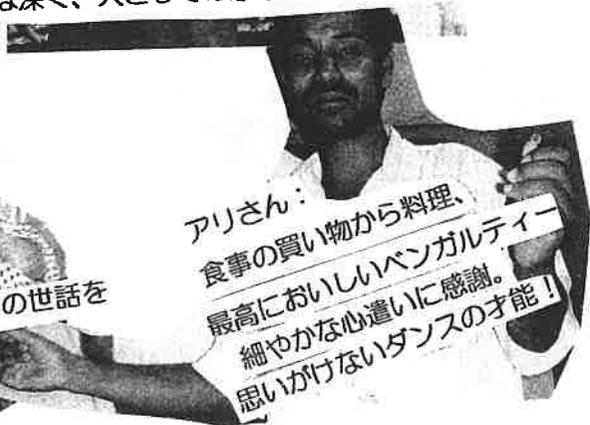
ナズマ母さんのダンス最高!

You are
my daughter
♡

バガートフ
しまよ

本当は数日間の予定が、思いがけず2週間ずっと、
暑い中、ただ黙々と 私たちのために食事や身の回りの世話を
してくださって心から感謝でした☆

Hemanta(ヘモンタ)さん：1994年～、マネージャー。
子どもの心をぐっとつかむ教育者であり、ハルモニアと歌のうまさは
右に並ぶものがない本物の音楽家。
そして彼のまなざしは深く、人としての厚みを感じさせる。



アリンさん：
食事の買い物から料理、
最高に美味しいベンガルティー
細やかな心遣いに感謝。
思いがけないダンスの才能!

Albert(アルバート)さん：BDPのボス。
 強力なリーダーシップ、いつも冷静で理論的。
 かっちりしている反面、ものすごくユニークでひょうきん者。

Think about it!
 Ok. I have a question!



「まがいのれ
 ても、また
 ら算とせ！」



彼によって投げかけられる質問は深く、
 信仰もあつく、愛の人。その愛は目の前の全ての人、
 何度も自分に問い直してくる。
 そして何よりバングラの全ての、
 子ども達へと注がれている。

私たちの前に「友人」として立ち、
 とことん「話す」!

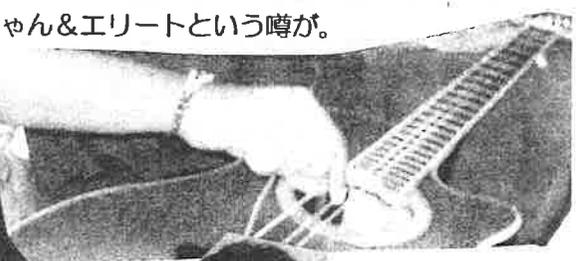
10分目
 彼は何を
 見ている?

The most important thing is! ?

☆
 ☆ Don
 ☆ Don
 ☆ Don



Dico(ディコ)さん：
 アルバートの秘書(?)。ギターがうまく、洋楽好み。
 短パンをはき、何だか新しい世代のにおいがする。
 坊ちゃん&エリートという噂が。



Erick(エリック)さん：
 1991年～、プーバイル所長。
 体格良く、そばにいただけで落ち着く存在感。
 寡黙ながらその温かい笑顔がエリックの魅力。

ショミルさん：2006年～、職業訓練校機械担当。
 タンプラーの名人・プロ。
 彼の手の動きは誰にも見えない。寡黙で誠実。

ニキルさん：2004年～、ドライバー。

いつもにこにこ、とっても優しくて人気者のニキルさん。
 だけど運転はやっぱりバングラ流?



ダッカスタッフ：
 あまり関わる機会がなかったけど、
 いつも私たちのことを考え、
 色々と動いてくださいました。



オシムさん：1991年～ドライバー。
 オシムさんポンポンン！彼が車をぬくたび車内に曲が!
 最初は心臓が飛び出しそうだった彼のドライビングも、
 彼の技術を知るや、怖さを超えてエキサイティング!
 ホントはお茶目。

プーバイルのBDPスクール

今年は大洪水のため農村に行けなかったため、プーバイルにずっといたこともあり、プーバイルにあるBDPのスクールには、A、Bチーム合わせて9校訪問しました。ACEFのスタディーツアーでの一番の目的である寺子屋訪問。一体どのようなものだったのでしょうか。



先生も見まはかし、必死に答へて来たおとすやに、目的の勉強の態度を改めなければいけません。教師の厳しさを覚えています。



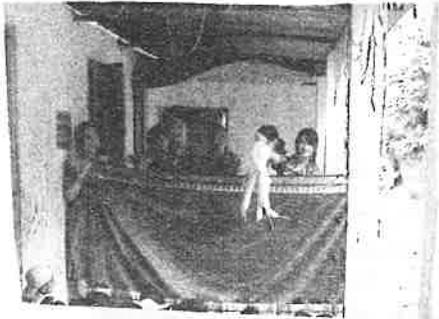
あつらぬと、前に出て来て、みんなの前で課題を解きます。見ているみんなも前に集中の。

一は、この本も、貴重なもの大切に扱っています。

BDPスクールでの子ども達はみな勉強することとにかく一生懸命！先生からの問いには、大きな声で答えを返します。使い古したノートに、小さな手でにぎりしめた鉛筆で一文字一文字を丁寧に書きこむ姿がとても印象的でした。

BDPの先生はみんな女性です。先生一人一人が工夫して、子ども達がちゃんと参加し、学ぶことができる授業をしようと、先生も一生懸命です。その先生にこたえるように、食い入るように黑板や先生を見つめます。

とある女性の庭にこ
本当にたてたの子どもたち
工場の子どもは、「カマ」を不思議がって見ぬる子供はよくぞです。



夕方の、劇の一コマ。これは「スイミー」の劇です。



日本人メンバーを前にして、先生達もたてたいますね。

ダッカ・スラム地区寺子屋訪問

ラルクティ(ダッカ市内)

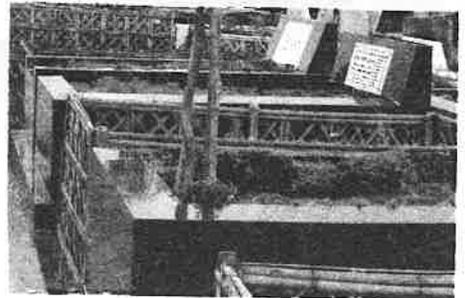
初めての寺子屋訪問。建物も大きかったけど、教室もたくさんありました。教室には所狭しと子供たちが座り、皆熱心に授業を受けていたのが印象的でした。子供たちは勉強できることに感謝していると思いました。すべてを学び取ろうという積極的な姿勢を見て、日頃の自分を反省する学生メンバーもいました。



← このお花最後にくれました♡
ありがとう。

モニプール(スラム地区)

こちらの学校はお墓の近くにありました。ラルクティの学校と比べると簡単なつくりの建物でした。スラムということもあり学校の周りに学校に通えない子供たちが大勢集まっていたのが印象的でした。私たちが来るといことを聞いて朝早くから待っていた、とのこと。私たちが出発する時に、車を囲み無邪気に笑顔で手を振る大勢の子供たちを見て、悲しくなりました。皆を学校に通わせてあげたい。学ぶ楽しさを教えてあげたい、と思いました。



↑
バングラデッシュのお墓

知子さん



のりこさん



Mother Teresa Asrom

知的障がいを持つ女性が暮らす施設に行ってきました。ここには子どもからお年を召した方まで 58 名の方が入居しており、シスターとヘルパーさんがそれぞれ 4 名ずつでお世話しています彼女たちは一日のほとんどを世界の人達のためにお祈りしています。日本では障がいをもつ方でも社会との関わりを持ちながら自立できるように仕事を得ることも出来ますが、この方たちにはそのような機会が与えられず、ただ祈ることだけに日々の時間を費やしているそうです。

中に入るとみなさん笑顔で私たちを迎えてくれ、私たちの手を彼女らの額に持っていき、次にキスかあごにもっていき挨拶をしてくれた。その挨拶は私たちのことを祈ってくれているようでした。58 名を 8 名の方で 24 時間お世話をするのは大変だと思います。ここにくるまで障がいを持った方がどのように生きていくのかほとんど考えていませんでした。栄養不足のために障がいを持った人も多いというお話を聞き、それなら障がいをもった方はもっとたくさんいるのだらうと思います。健康な人でも生きていくのは大変なのに、ここにはいらっしやらない障がいを持った人たちは他にはどこでどのように暮らしているのでしょうか。

施設の入所者がとても多く、人手が足りなく大変だと思ったけれど、暮らしている女性たちはとても幸せそうでみんな優しい顔をしていた。私たちの訪問をととても喜んでくれたのが印象的だった。あの笑顔がいまだに忘れられない。写真をデジタルカメラで撮り、すぐ見せてあげるととても喜んでくれた。このような施設が国内に一つしかないと聞き、政府がもう少し考える余裕があればいいのにと考えた。

施設の入所者がとても多く、人手が足りなく大変だと思ったけれど、暮らしている女性たちはとても幸せそうでみんな優しい顔をしていた。私たちの訪問をととても喜んでくれたのが印象的だった。あの笑顔がいまだに忘れられない。写真をデジタルカメラで撮り、すぐ見せてあげるととても喜んでくれた。このような施設が国内に一つしかないと聞き、政府がもう少し考える余裕があればいいのにと考えた。

by 治菜



おどろてくれました♡



笑顔が
まぶしい
々々

職業訓練校

広い校庭の一角に位置するこの職業訓練校には、機械科・コンピュータ科・電気科がありました。ここではみんな、停電で暗い中、難しそうに技術を生き生きとした表情で学んでいました。普段行く学校と兼ねていて、しかも遠くから通っている人も多く、その勤勉さに脱帽でした。みんな英語が話せたので、お互いに質問をしあうなど、楽しい交わりの時がもてました。



機械科



シヨミルさんの教える
機械科は、自動車のエンジンの構造を学んでいました。ディーゼルとそうでないエンジンの違いを丁寧に説明してくれました。どうやら使用しているエンジンは日本製のものらしいです。

コンピュータ科

サイフルさんの教える
コンピュータ科では、女性たちの授業の時間帯でした。日本では使わなくなった古い型のパソコンを解体していました。この部品はなに？と聞くと詳しくきっちり説明してくれました。でも、この技術を直接仕事に生かすのは難しいのだと彼女たち自身が話していました。



電気科

プロカッシュさんの教える
電気科では、天井扇風機のコイルを巻いていました。こうして手で巻くと、ちょっと故障しても捨てずに何度も手でコイルを巻き直して使うことができるのだそう。電気科なのに停電の中、学ばなくてははいけないというつらい状況でした。



プーバイルカレッジ訪問

8月14日はプーバイルにあるカレッジに行きました。

Bangladesh の教育制度では、カレッジは日本の高校2年から3年生にあたります。教室ごとに分かれて入り、カレッジの先生の司会のもと、まず簡単な自己紹介を英語でしました。

いつもの学校訪問とは違う、少し大人の生徒達を前にして緊張します。

けれど100人近くいる生徒達はみんな私たちに興味津々！

先生が何か質問はありますか？と問うと、たくさんの子達が手をあげます。

日本の文化、食べ物ことや、Bangladesh のどこが好きか、教室によっては真面目な先生からの質問で、日本の国際関係、教育制度に関することなどを聞かれたようです。

普段見ること話すこともできない、本当の意味での異国の地からきた私たち日本人に

教室全体がとてもよい刺激を受けているように感じました。

そしてある教室では、メンバーが、日本の文化紹介として童謡を歌ったり、

空手の実演 (!) をして大いに盛り上がりました。そのお返しとして、男の子が一人で

Bangladesh の歌を歌ってくれたり、とてもよい国際交流の時をもつことができました。

メンバーの中には、ホームステイ先で出会った子と思わぬ再会をするという喜びもありました。

教室見学のアとは、カレッジの校長先生のお部屋で、お話を聞いたあと、

とても教育熱心は

先生たちに見送られながら学校を後にしました。

↓ この真ん中に並んでいる先生は、とても銀い質問を私達に投げかけていました。



教室の隅に使用の教壇が設置されています。
男子のみなさんのアックス入視標には、トキメキが溢れています。

BOPの偉大な存在感に感動しました。
中にはBOPや自身の子どもたちとしてみんな本心にいいエガオをこぼしています。

けれども、カレッジまで行けば子ども達はまだまだ多岐にわたります。教育の機会が全この子ども達に与えられるように、これからBOPとACEFは共に働いていくのです。

☆ホームステイ☆

農村に行けなくなった分、BDPのスタッフさんたちが私たちのために準備してくださったとても素敵なプログラムがホームステイです。8月10日の夕方から11日の朝にかけて、二人一組のペアとなって女子はBDPスクールの先生のお宅、男子はBDPスタッフのお宅で過ごし、生のバングラデシュ人の生活を体験してきました!!全員の話を載せるのは無理なのでここではその一部をどうぞ。

☆ さかえと遙の場合 ☆

カイルナハル先生のお宅にホームステイしました。夫のモバラクさんはプーバイルカレッジの体育の先生!夫婦そろって教師でした。子供はオルナという6歳のカワイイ女の子が一人いました。おうちの周りには親戚が住んでいて一族が一带に住んでいるという感じでした。はじめにサリーを着せてもらいました。着物のような着心地で着ると気が引き締まりました。とてもきれいで民族衣装の美しさを実感しました。サリーを着たまま一通り親戚にあいさつ回りをした後は、メンディをやってもらいました。これは掌、手の甲、足の甲にヘナで模様を描くことです。肌がほとんど見えなくなるほどびっしり書いてくれました。バングラデシュの人に一步近づけた気がしました。



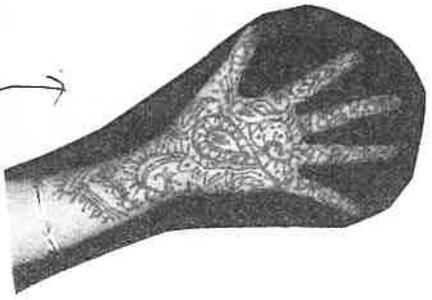
↑ カイルナハル先生
おれ



サリーを着せてもらいました。

メンディをやってもらっている間に部屋に親戚がたくさん集まってきて最終的に25~30人くらいいました。皆ジョークが大好きでずーっと笑っていました。お互いの言葉を教えあったり歌を歌いあったり、国のことを教えあいました。外国人が家に泊まることはとてもすごいことのように(日本でもそう多くはないですよ)、私たちが来てくれてとてもうれしい、ということは何度も言ってくれたのが印象的でした。感情を素直に表現できるのは素敵ですね。ホストファザーのモバラクさんは次に私たちがバングラデシュに来たら空港から直接家に来てくれ!!とまで言ってくれました。とてもうれしくて感激しました。翌朝家を離れる際は温かく迎え入れてくださったホストファミリーと親戚の皆さんの優しさに感謝の気持ちでいっぱいになって別れが辛かったです。また来てね!君たちの事絶対忘れないよ!と何度も言ってくれてどうしてこんなに優しいのだろうと思ひ涙が出そうでした。ドンノバット(ありがとう)といくら言っても足りないくらいです!

これバ「メンディ」です。





☆塚潤の場合☆

塚潤はホームステイ先のBDPスタッフのオモルさん宅でもたくさん踊っていたようです！（笑）
どこにいてもムードメーカーですね♪

☆山旬と鴻介の場合☆

二人はBDPスタッフのエリックさん宅にホームステイしました。奥さんのシルピさん、息子のショボ君、娘のエミちゃんと楽しく遊びました。日が沈んだ後には何と蛍が出現！鴻介は初めて見る蛍に大興奮でした。夜は近所にあいさつ回り。どの家庭も皆でTVを見ていました。夜はやる事が無いようです。いつものことですがこの日の夜も停電。ファンなしの一夜を過ごしました。BDP オフィスには発電機がありますがホームステイ先のおうちにはもちろんありません。そのためこの日はどのメンバーも暑い夜を過ごしました。じっとしていてもじわじわ汗をかきサウナの中にいるようでした。この日の夜の暑さは記録的でした!!

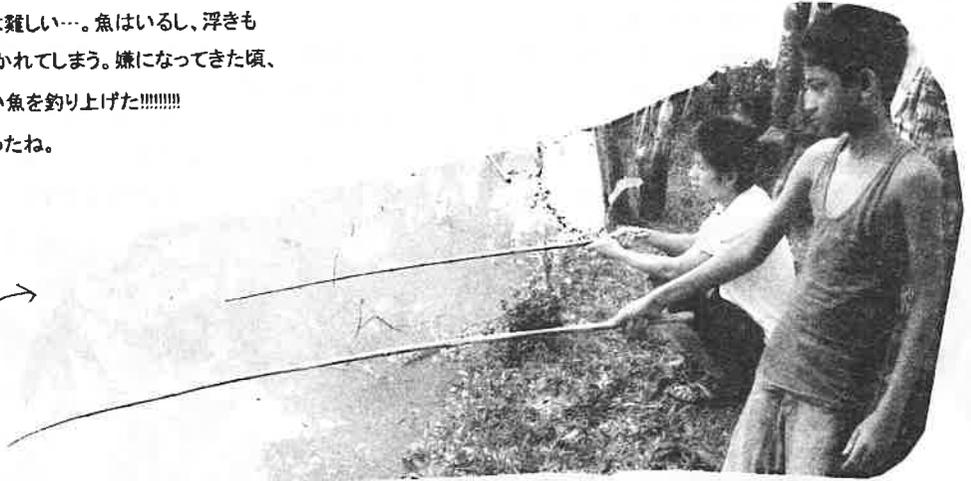
翌朝、鴻介の希望によりエリックさん宅近くの池にて“釣り体験”が行われました♪しかし釣りは難しい…。魚はいるし、浮きも動くのに引くと餌だけもっていかれてしまう。嫌になってきた頃、何をどうしたのか鴻介が小さい魚を釣り上げた!!!!!!
ヤッターね☆早起きした甲斐あったね。
エリックさんありがとう!!!!

山旬 + エリックの家



釣りを楽しむ

鴻介とショボ君



メンバーの感想

◎最貧国のひとつであるバングラデシュだけど、そこにはその暮らしがあって、人はみんな悲しんでばかりいるわけではなく、私たちと環境は違うけど、同じような感覚で生活をしているんだということが、すごく実感できた。少しの間でも、実際の生活の中に飛び込んでみたことによって、バングラデシュに対する壁は、ぐっと薄くなったと思います！（くるみ）

◎言葉はほぼ通じなかったけど、ベンガル人はフレンドリーでとっても優しい!!!（萌）

日本食 & バングラ食パーティー

BDPの先生方をたくさんプーバイルオフィスに招いて、日本人メンバーはお好み焼き、天ぷら、肉じゃが、うどん、を作りベンガル人サイドはオフィスの外でかまどを作り、大鍋にチキンカレーを作りました。

朝から市場に行き、キャベツ、インゲン、ジャガイモ、玉ねぎ、ナス、トマト、オクラ、小エビ、干しえび、牛肉、小麦粉、卵 等々を買ひ、調味料などは前の日に大きなスーパーで買っておいたものを使いました。



山ジュン・レポート

市場から帰ったら、さっそく調理。玉ねぎの皮むき隊とジャガイモの皮むき隊に分かれる。包丁もまな板もないから皆代用。台所は暑いを通り越していました。とりわけ今日は暑く風もないので、もはや汗をふくという次元ではない。湯水のように流れる汗はふいてもムダなので無視。かまどに火をくべて暑さと熱さに耐えてのクッキング。

まず肉じゃがと天ぷら、その後お好み焼きとうどん。

調理に約2時間。かなりの重労働に実務隊はしばらくグロッキー状態。だいたいこういうときに限って停電でファンが止まっているのです。

その間、ゲストの先生方は外で巨大鍋にチキンカレー。

さあ、出来上がり。おもむろに食べ始める先生たち。え？アナウンスとか、皆さんいただきますとか、ないの？なんとなく食べ初めて、なんとなく食べ終わった感じ。でも日本食も食べてくれてほぼ完食。良かった良かった。

やっぱり、しょうゆベースの味を思い出すと安心してしまう。バングラにいたらぜーったい日本食なんか食べるもんかと思ってたのに。だしの味は格別だ。やっぱり日本人だな～。

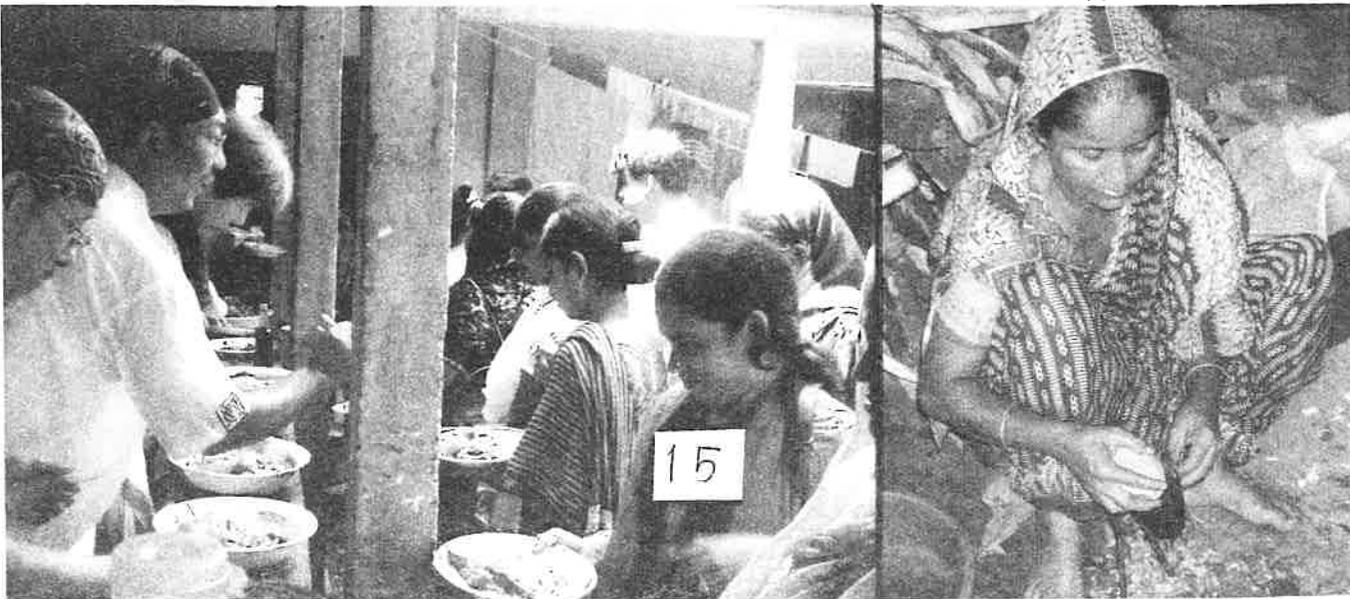
しゅうさん・レポート

かまどの火で熱く、煙が目にしみ、とてもハードワーク。食事をいつも出してくれる女性たちの大変さがあらためて忍ばれる。

先生たちは58人、彼女たちも外でチキンカレーを料理。手なれた手つきに、彼女たちが先生だけでなく家事労働にも日ごろから従事することを再確認した。

日本食を並べたカウンターにカレーを盛ったお皿を持つ女性たちが、始めはコワゴワと、次第に次々やってき、食べてくれた。ボクたちも皿にカレーと日本食を同時に盛るチャンボン式で、普段の倍のボリュームの食事をおいしくいただく。

ジャガイモの皮をむくナズマさん↓



CULTURE SHOW

踊ってくれた
女の子達♡
とってもカワイイ!



スタディツアーの最後のビッグイベントがカルチャーショーです。ブーパイル地区のBDP スクールの生徒たち、先生、またホストファミリーやBDP スタッフの家族など総勢 60 名ほどがオフィスに集まり、子供たちと私たちが歌やダンスを披露しあいます。また今回は農村に行けず二週間ブーパイルに滞在したため近くに住む子供たちと親しくなったので、彼らも見に来てくれました。うれしかった〜♪

A チーム

スイミーのペープサート、わらしべ長者の劇、We're all in this together (High school musical より)の歌 (ダンス付き) の三つを披露。最後のダンスで会場は大盛り上がり!!「この場にいるすべての人に対する感謝の気持ちをこめて踊った。特に近所の子供たちの喜ぶ顔が見れてうれしかった★最高!!」(さかえ)



スイミーのたよ〜



踊るさかえ

B チーム

ふるさと、手のひらを太陽に (手話付き)、ソーラン節、花を披露。子供たちは大好きなソーラン節をとて喜んでいました。バンガラの子供はダンスが本当に好きです。また、麻理が BDP スタッフのアルパートさんと「シャンゼリゼ」をセッション!!柔らかな歌声を響かせてくれました♪

最後はBDP スタッフと私たちが「アミ ダウテル モト ガンガイ」の大熱唱♪♪皆ノリノリで飛び跳ねて歌っていい汗かきました。やまじゅんいわく今までで一番盛り上がったカルチャーショーだったそうです。



ソ〜ラン♪
ソ〜ラン♪



歌の麻理

国立博物館（ダッカ）見学

展示されていたもの

バングラデシュの様々な統計資料、資料地図、大昔の農具、織物、民芸品、仏像、輸入品、世界の人形、古代美術、現代美術、独立戦争時の資料、戦士や英雄たちの資料、世界の偉人の絵、世界の有名な絵画作品など。

見学

各自が自由に見て回りましたが、写真の4人は右からの二人目のギタ（本名ギタラン・ダシ）が館内を案内してくれてツアーのように見て回りました。彼女は BDP 寺子屋学校卒業生で卒業生との交流会にも来てくれた子です。ダッカ大学の2年生で、英語を専門に勉強しています。国立博物館はダッカ大学のすぐ隣にあるので、私たちが見学することを聞いて案内のために同行してくれたのです。感じが良くて、積極的に話してくれる、とても素敵な方でした。



ギタ

国立博物館内は撮影禁止のため
建物前でパチパチ

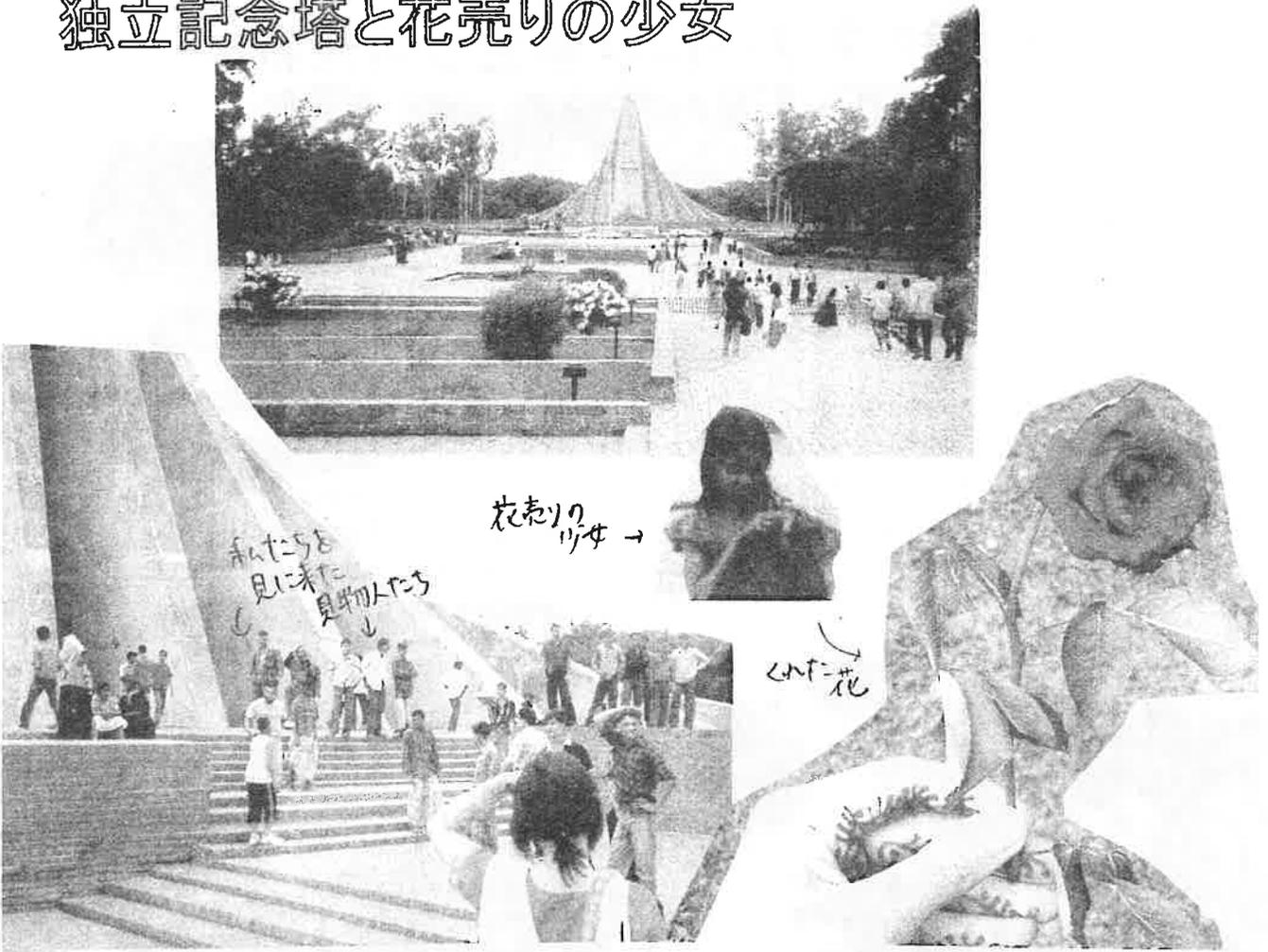
感想

かなり良い状態で歴史的な物が展示されていて驚きました。展示物も多く見ごたえのあるしっかりとした博物館です。博物館ですが、美術作品もかなり多く展示されていて、さすが黄金のベンガルと謳われただけあると感じました。芸術に高い関心を持つ国民性も感じられました。

しかし一番印象深いのは独立戦争についての展示です。血のついた軍服や記録写真など生々しい展示物もあり、独立戦争の惨さについて正確に知ることができました。

また、私がバングラデシュの二度の独立の経緯についてや独立時の複雑な事情などを知っている、勉強したよ、とギタに話した時、彼女がとても驚いて嬉しそうにしていたことは印象的でした。国を心から愛しているからこそ、多くの人に自分の国について知ってもらいたいのだろうと思いました。国に誇りを持ち、胸を張って歴史を語れることはすばらしいことだと感じました。

独立記念塔と花売りの少女



独立記念塔を見に行きました。このモニュメントは、バングラデシュのお札にも描かれていて、各国の元首がバングラデシュに来ると、ここを表敬訪問するようです。1971年の独立戦争の時に、パキスタン軍によってバングラデシュ人が全国で無差別に虐殺された時、トラックで運ばれた遺体はこの場所に捨てられたらしく、その無数の遺体が埋められた場所に独立後、記念塔を作ることになったようです。ちなみに、このモチーフとなったのは、雨季のバングラデシュで見られる、繊維部分をそいだシュートの芯を束ねて乾かしている風景らしいです。いつものことなのですが、ここでは、見物に行ったのに逆に、たくさん見物客に見られているのを特別強く感じました。この敷地内には、イギリス庭園のような緑豊かな整備された環境があり、驚きました。記念塔の中は空間があり、中を歩き回ることができました。バングラデシュの人たちの、独立への思いが想像できました。

ところで、記念塔周辺には今までより明らかにたくさんの物乞いの子ども達がいきました。やや強引に、中にはメンバーの脚にしがみついて離れようとしないう子もいました。脚が変形して小さくなっており、座った状態でただ力なく私たちを見上げてお金を求める少年もいました。印象的だった子の1人に、花売りの少女がいました。出会ってから別れるまで、私たちのそばを離れず、きれいな赤い花を差し出してはお金をちょうだい、と言い続けていました。少しウェーブがかった髪に、花柄のワンピースを着てかばんを肩からさげ、さっそうと歩く後姿が忘れられません。彼女と会話した様子では、彼女のお父さんは死に、お母さんは人の家に働きに出ており、彼女は朝7時から夕方5時頃まで、こうやって人からお金をもらうためにここへ来ているという。中には、彼女が年下の子ども達に、物乞いをするよう指示していたのを見たメンバーもいます。なぜ、こんな幼い子どもが一日中、こんな場所で、お金をもらおうと必死なんだろう。別れ際、警備員に追い払われる彼女を見ながら、単なる哀れみや同情ではなく、この不自然な現実、抑えきれない、怒りに近い悲しみがこみ上げてきました。

～BDP スクール卒業生との交流～

皆さん →
なかなか素敵な
若者でした。



今回のツアーでは、BDPスクールを卒業して
大学に進学した学生13名とBDPのプーバイルオフィスにて交流する機会がありました。
はじめに一人ずつ自己紹介した後、日本人2、3名と大学生2、3名のグループに分かれてそれぞれ自由
に話し合いました。話し合った内容は、日本の天皇制度について、日本の学校制度、また英語教育
はどうなっているのかなど。(英語専攻の学生)なかには「なぜこの国は貧しいと思いますか?」と聞いて
きた学生もいたようです。



↑
← いろんなことについてお話ししました。

メンバーが感じたこと

- ・ダッカ大学の学生だったので、とても問題意識が高く、興味の幅が広いなと思いました。話していても楽しかったです。また、彼女たちの英語力にも驚きました。(萌)
- ・さすが、100分の7(バングラデシュで高校1年まで進学できる割合)だけあって、学ぶ姿勢や、人生、国に対する意識が明確だった。片方は先生になりたい、もう片方はビジネスをしたい、とのこと。BDPの卒業生が先生になりたい、と思うということは BDP スクールの教育が成功していることの証だと思う。彼らには将来、バングラデシュという国を支えていく柱になり、後輩たちにその背中を見せながらがんばって生きていってほしいと思う。(治菜)

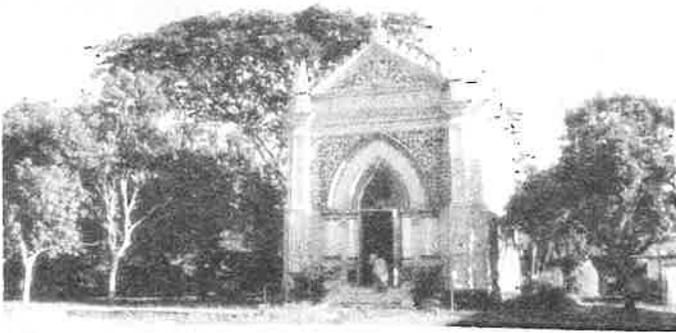
ヘモトさん →
も参加☆



ボートトリップ&教会見学

8月3日。バングラデシュでの生活が始まったばかりの二日目、私たちはボートトリップに出かけました。誰かが動けば左右に揺れるボートの上でひやひやしなながらも、
 どんどん進んでいくボートに、風を体で感じます。そして本当に美しいバングラデシュの自然に心が洗われました。バングラデシュはほとんどが低地の国土なので、
 太陽を、空を遮るものは何もありません。日本ではまず見ることができない光景に、
 ただただ感動するばかり。けれど、私たちが通った水は、
 大洪水で流れてきたものです。この流れてきた水で、
 苦しんでいる人達がいることを考えると、
 メンバー一同複雑な気持ちにもなったのでした。

本来はここには水はありません。大洪水の被害を感じます...



ボートを降りて市場を通り抜け、
 しばらく歩いたところにカトリックの教会がありました。

日曜日ではありませんでしたが、近所の人がお祈りに来ていて、とても神聖な雰囲気です。
 バングラデシュでは少数しかいないクリスチャンの人々も、
 教会を、お祈りのときを本当に大切にしている様子が伝わってきます。

↑
 下でエガ
 カラフルは
 教会でした。

エガ様のためのスペースが他の場面にありません。

教会の近くには、教会付属の女子寮がありました。
 もちろん男子禁制！女性のメンバーで
 見学をすることができました。
 みんなとてもかわいい子達ばかり。
 この寮では勉強をしながら家族と
 離れて生活をしています。
 英語が話せる子が何人かいたので、
 聞いてみると、
 家族と離れてさみしいけれど、
 ここでの生活は充実しているそう。
 将来への夢をふくらませている子でいっぱいでした。



このはちみんばかりのエガ
 本当にバングラデシュはエガが
 よいのです。
 よくして日本にまたたか



ヘモントさん



エリックさん



オムルさん

オムルさん邸
リキシャとバイクで行きました。ピンキーちゃんがダンスを披露してくれました。やっちゃんもとびきり綺麗なサリーを着せてもらい、本当に良く似合っていた。ここでもヌードルをいただき、私たちはヌードルのとりことなりました。



エリック邸
やしの木の舟に乗って、修さん&塚じゅんさん&治菜さん&コーちゃん&千尋が挑戦！塚じゅんさんが転落面白かった☆
チャーとお菓子をこちそうになった。お米の粉から作られていて、すーごくおいしくて幸せでした。エリック氏の写真なんかも見ました(メンバーKの日誌より)

ヘモントさん邸
30年間先生をしたというお父さんの住む家を見て、お兄さんの住む家(お兄さんはサウジアラビアに出稼ぎ中)に招かれ、冷やしてあったココナッツジュース、卵の入ったヌードル、チャイをいただく。ジュースもおいしいし、ヌードルも温かく申し分ないが、久しぶりに懐かしい味だと思ってしまった。(メンバーHさんの日誌より)

家庭訪問

みなさん家族がとて多くて、日本の核家族化を少し寂しいことだと思いました。この温かい家族に、温かいスタッフありだなあとしみじみ感じた家庭訪問でした。



プロカッシュさん

プロカッシュ邸
教会訪問の後、お邪魔させていただきました。新婚ほやほやのプロカッシュさんの若くてキュートな奥さまに会うことができました。甘くておいしいクレープ巻きのお菓子とチャイをいただきました。愛すべき息子のDion君に、みんな癒されました☆



サイフルさん

サイフル邸
サイフル家は遊園地みたいにリッチだった。ラハジさんが「ボンボン」と言った。サイフルさんファミリーを紹介され、病気のお父さまのお見舞いをした。サイフルさんのおばあさまもお元気で驚いた。サイフル息子のシュボ君とテレビを見たり、おやつでヌードルや、パイのめっちゃでかいやつを食べた。あとサイダーももらった。そしてサイフル氏出演のPV(プロモーションビデオ)を見て笑った。

ラハジさん



ラハジ邸
突然の訪問にも、たくさんのお菓子でもてなしてくれたラハジさんご家族の皆様。訪問もそこそこに、ただ食べるだけ食べて申し訳なかったです！

言葉

Bangladesh の母国語は **ベンガル語** ですが、英語も喋れる人がたくさんいます。小学校くらいから英語を習っているので日本人より喋れる人が多いかも！！

～ベンガル語プチ☆基礎講座～

☆ あいさつ

アッサラーム・アライクム イスラム教徒に対してのこんにちは。敬礼のようなポーズで
オアライクム・アッサラーム アッサラーム・アライクムの返答

ノモシカール イスラム教徒以外のこんにちは

ケモナチェン お元気ですか？

パロアチ 元気です

コダ・ハフィズ イスラム教徒のさようなら

アバルデカホベ また会いましょう

ドンノバット ありがとう

☆ 会話

アプナール・ナム・キー あなたの名前は何か？（年上に対して）

トマル・ナム・キー あなたの名前は何か？（子供や親しい人に対して）

ボエシュ・コト いくつ？（子供に対して）

バーロ GOOD

シュンドウール きれいな、美しい、上手、すばらしい

食べ物 手で食べます

カレー

毎日カレーですが、毎回チキン、ビーフ、魚、野菜、カボチャ、などの違った具が食卓に並びます。魚の日は何の魚だったかまで当てられるようになれば、もうあなたはカレーマスターです。

ダルスープ

カレーには欠かせないダルというお豆のスープ。にんにくやしょうががたっぷり入っていて元気がでます。辛くないです。

ルティ

ナンの親戚のような無発酵のパン。朝ごはんです。ルティでカレーを包んで食べます。バナナとチョコを包んでクレープっぽく食べても◎

フルーツ

マンゴー、バナナ、パイナップル、グアバ、ジャックフルーツ、ジャンブラー、などなど。全部食べ放題です☆日本では食べられないようなおいしさです。

チャー

ベンガルティー。これがなければバン格拉生活はおくれません！とっても甘いのですがスッキリした甘さで、香辛料のにおいが気持ちをほっとさせます。



衣服

女性：みんなサリーかサロワ・カミューズを着ています。結婚している人はサリー、結婚していない人はサロワ・カミューズを着ますが、利便性のために結婚していても働いている人はサロワ・カミューズを着ている人もいます。

私たちがサロワ・カミューズで過ごしました。通気性がよく、なによりすっごく楽です！洗濯してもすぐに乾いちゃいます。



下が「サロワ」
上が「カミューズ」
スカーフは「オレス」



重い...

男性：ワイシャツにズボンと普通の洋服を着ている人が多かったです。部屋着(家着?)としてルンギ(腰巻)をはきます。こちらにも楽チンスタイルです。ルンギは普通家の外ではくことはありませんが、貧しい人は外でもはいています。特に力車をこいでる人はルンギをはいています。

輪がにした布
を結んでほきます

ルンギ →



音楽

バングラライフに音楽は切っても切り離せません。スタッフはもちろん全員音楽大好きでした。演奏は主にハルモニウムという小型オルガンとタブラという太鼓で行われます。オフィスでは毎日暇さえあれば演奏し歌っていました。学校でも必ず歌が歌われ、踊りを踊ってくれた子どもたくさんいました。

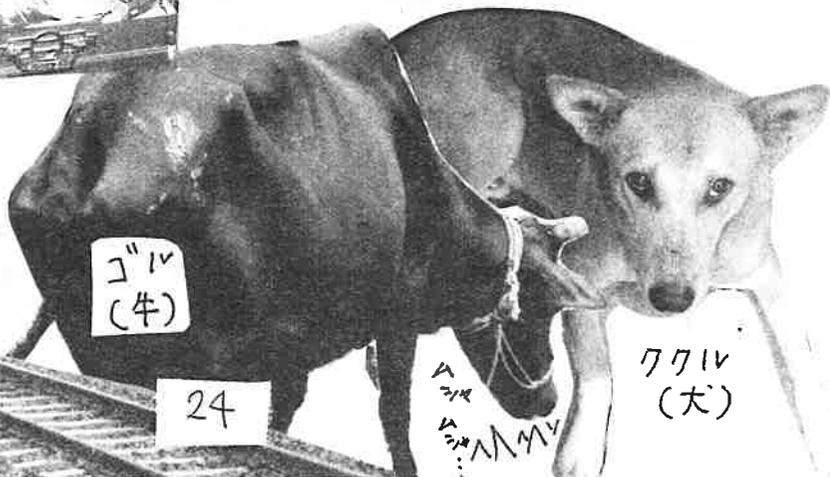


みずの全てが「新鮮」
人もカ車も車も電車を
色にあふれていました

重カ物



電車



ゴビ
(牛)

24

クワル
(犬)

私たちに与えられた選択肢

ACEF事務局長 中川英明

プーバイルに到着した日に、開会礼拝に引き続いて行なわれたオリエンテーションの冒頭で、BDP 代表のアルバートさんが話してくれたことを思い起こしています。私たちはみな、小さなことから大きなことまで、毎日多くの決断や選択をしながら生きています。日本で暮らす人たちの選択肢は、バングラデシュに暮らす人たちの選択肢よりも多いのではないかと日本に行くと思うのだけれど、みなさんはどう考えますか、と私たちに問いかけたアルバートさんは、また、この夏の二週間をスタディツアーに参加してバングラデシュで過ごすという選択をしてくれたことを嬉しく思う、とも仰いました。

たとえば、朝、目を覚まして起き上がり、顔を洗い、歯を磨き、着替え、朝食を摂るときに、これらのことをどんな順番で行なうか、顔を洗うとき、歯を磨くときに何をを使うか、どんな服を着るか、何を食べるか、などを、私たちは自分で決めながら、選び取りながら生きています。時には無意識のうちに、またある時は熟考の末に。私たちに与えられている選択肢の数は、例えば、私たちが選ぶことのできる歯ブラシの種類は、バングラデシュに暮らす人たちに与えられている選択肢に比べて、確かに遥かに多いのだと思います。また、ものごとを決めたり、選択したりということを迫られる場面や頻度も、私たちにはより多く与えられているように思います。

どんなことでも、私たちは、自分で考えて選び取っているわけです。もちろん、選択をする際には、さまざまな制約が同時に課せられていることも多いですから、自分の好き勝手に、どの選択肢でも自由に選ぶというわけにはいかない場合も、実際には多いことでしょう。それでも、与えられた制約の中で、自分が最善だと思う選択をするということを繰り返して私たちは暮らしています。時には後ろ向きな選択肢しか与えられず、より良いという観点ではなく、より悪くないという観点からしか選ぶことができない場合もあるでしょう。そのような場合でも、私たちは、その時その場所で自分が最善だと思う選択をするほかはありません。

スタディツアーの間は、日常から離れ、バングラデシュの生活様式で過ごしてみましよう、という願いをしました。食事、手洗い、入浴などを、私たちが普段しているのとは全く違うベンガルのやり方でやろうということです。そのように、異文化を身をもって経験することから学べること、学ぶべきことは、非常に多いと思います。

食事の際にお菓子を食べたり、バナナをロティに巻いて食べたりするときには、ベンガルの食事をベンガル式に食べることをしない、という選択をすると同時に、カレーに飽きて食べられないから、体力が損なわれないように、食べられるものを食べておく、そして元気を保つ、という選択をしているのだと思います。どちらも大事だけれど、両方を同時に選ぶことができないという場合には、自分にとってより大切な方を選ぶしかないでしょう。そして、そうなのであれば、あまり深く考えずに、軽率な選択をしてしまうのは、いかにも残念です。自分に与えられた選択肢について、真面目に、真剣に考えることができるように、そして、いつでも、意識的に、大切な方を選びとることができるように、そのような自分でありたい、という思いを強くしたスタディツアーでした。

価値観の違い

ACEF事務局 井上儀子

2週間の生活の終わりに近づき、「さあ、私たちの出したごみは燃やしましょう。」メンバーから出た声に、何人かがくずかごを持って外に集まりました。ああ、まただ…。ここ数年私は複雑な心境でした。私たちがごみを燃やすのを現地の人たちは決していい顔では見ていないのです。アルバートさんもやってきて、「ごみは燃やさないでそのまま中に置いておいてください。」その声を聞いても、私が「燃やさない方がいいと言っているのだから。」と叫んでも聞かれず、ごみは赤い炎をあげて燃え始めました。

今までのスタディーツアーを振り返り、私たちの残したごみはどうなったかを考えると、スタッフはくずかごを持ち外に出、田んぼや川の土手に、ざあーっとひっくり返し、何事もなかったように引き返してくるのです。それはないでしょ！と私たちはびっくりし、自然を汚さないで燃やして土に返すのが一番。自分たちの出したごみは自分たちで始末して帰ろう。…日本人らしい美德に聞こえます。

しかし、「日本人のやることだから仕方がない。」そんな目で見られているような気がしていました。遠巻きに眺めるスタッフの間に立ち、本音を聞いてみました。「確かにどこへでもポイポイとごみを投げ捨てる習慣はよくないかもしれない。日本人はキャンデーの紙ひとつでもちゃんとポケットの中に入れるのはよいことだ。」「でも、この間畑の中に捨てたごみはちゃんとその家の人がとりに来て、かまどで燃やしているんですよ。」気がつく、悲しそうな顔をしてじっと燃えるごみを見つめているおばあさんが立っていました。その家のおばあさんでした。料理をするにもかまどで燃やすときぎが集められないと、紙だって何だって燃えるものは燃料になるのです。だったら、BDPの台所のかまどで燃やせばと思うのですが、もっともっと貧しい人のためにさりげなく手助けをしているのです。そう言えば、9年前の大洪水のときも、私たちの料理時に出る野菜くずやご飯のねばねば汁などをもらいに来ていたおばあさんがいました。普段は牛のえさになるのですが、その時は全国的に食料不足で値も高騰し、食べるものを買えなかったのです。

私たちは日本の社会が当たり前と思って生活していますが、状況が変わればその土地によって、そこに住む人々によって価値観はまったく変わるでしょう。私たちが良いと思ってすることも、悪いと思ってしないことも、まったく逆の目で見られているかもしれません。日本人だから、外国人だから、と何もかも許されて、私たちは好き勝手な行動をとっていたようです。私たちはお互いに違う存在であることを知り、まず相手の気持ちを「聞く」ということを忘れていたように思います。私とあなたは違う。だからよく聞き、よく見て、理解しようと努める。そしてよく理解することから愛が生まれるのです。そのことを再認識させられました。

一輪の赤いバラ

ACEFバザー委員 高崎和子

今回のスタディーツアーでいくつかの涙を見ました。深夜の空港に着き、物乞いをする子どもを見て、胸が苦しくなり涙した人、カルチャーショーでBDPスクールの子どもたちと、オフィスの近所の子どもたちの格差に自分がどうして涙が出るのか分からない、自然に涙が出てきたのと言っていた人、最後の日に色々思い出し矛盾を感じどうしようもない現実には涙した人、この人たちと共に生活できたことに感謝します。彼女たちが何を思い、何を考えたのか、何年か後に聞いたり見たいと思います。きっと彼女たちは大きく変わっているでしょう。

私は独立記念塔で、出会った花売りの少女が今も目に浮かびます。ダッカの街は明かりも増え、高層ビルも増え、信号機も増えました。16年前ここへ来た時も花売りの少女はいました。貧困の中で生きていくための少女の知恵なのでしょう。物乞いをするより一輪の花を売ろうとしていたのでしょうか。いまだに花売りの少女がいる現実にやり場のない気持ちになりました。少女は一輪の花に何を思っているのか、一輪でも多く売れることでしょうか？ 私たちに5タカ、5タカと言ってずっと着いて来て、ふと気がついたときには儀子さんが手にしていました。少女はお金をください、お金をください5タカです、と訴えているようでした。儀子さんは、いつもアルバイトさんが子どもたちに分け隔てなく接して欲しいといっているの、少女に話しかけたとのこと。父は無く母は働きに出て、少女は9時から5時までここで花売りをしていること、学校も行っていると話したそうです。花は最後は潤一さんの胸ポケットにありました。少女は諦めず車の所までついてきました。少女はきっと5タカが欲しかったのでしょう。5タカの代わりに潤一さんが飛ばした紙風船を笑顔で追いかけていきました。ずっと物乞いをするような目で私たちを見ていたので一瞬の笑みで心が救われました。少女が大きな袋を肩に掛けうつむきかげんに歩く後ろ姿が気になり目に浮かびます。貧困とは貧困の中でどのように、生きていくのか？ 毎回訪れる度に残される課題です。

素敵なメンバーに出会えて色々教えてもらいました。ありがとう。ドンノバッド。

自分には心配する相手がいる、その幸せ

横須賀学院小学校教諭 山口 旬

今年、まわりから「また行くの？」といわれ、自分でも「また行くのか？」と自問しながらふらふらと参加申込書を送っていました。

食べなれたカレー。当たり前のように舌になじんでしまった味は違和感なく、おつうじも好調。昨年はいろいろとご迷惑をかけましたマンゴーも1年分は食べだめができました。

カティラに行かれなかったのは正直ショックでした。けっこう落ち込みました。5年前の最初の旅で出会ったカティラの人たちと会える。お土産や当時の写真などをしこたま用意して再会を期していただけあってウジウジしました。

けれどプーバイルでの2週間はこれまでのツアーにはない楽しいことがいっぱいあった。

①ホームステイ

これまでオフィスや学校訪問でしか一緒にいなかったスタッフ(私はエリックさん)の家に泊まった。停電にはまいった。気が変になりそうなくらい暑い夜だった。でも現地の人たちがどんなところに住んでどんな生活をしているのか、ほんのちよっぴりだけ見ることができた。こういうところに住んでいて洪水になったら買い物どうするんだろ、電気が止まったら、雨が降ったら、いろいろと想像の幅が限りなく広がった。日本に帰って今までのようにただ懐かしく顔を思い出すだけでなく、彼らの家族までも、その生活を思い図るようになった。

②歌づくし

こんなに歌いまくったのは初めて。今回はベンガルソングノートを作ってひたすら歌詞を聞いて書きまくった。カルチャーショーでみんなで歌い踊ったとき、バングラに来てやっぱりよかった、こういう人たちと出会えて幸せだと心から実感した。

③汗が出ない!

過去3回のツアーでは、40回にわたる食事で汗をかかないことはない私は「カレーを食べると汗でびしょびしょになるヘンなやつ」として有名だった。29回ツアーの報告書P17、31回報告書P5にも書いてある。ところが！自分ではまったく気がつかなかったのだがツアーも終盤にさしかかったころ、のりこさんがふと「そういややまじゅん、汗かいてないねえ」え？ほんとだ！なぜだなぜだなぜだ、自律神経失調症か？「ベンガル人に近づいたってことかもよ」とのりこさん。やった。これで目録は取得したということにしよう。あとは免許皆伝までもうちよいがんばるしかない。

世間に国際交流は数あれど、相手の顔が見える関係こそ本物。現地に心配する相手が出て、むこうにも自分を心配してくれるであろう人がいる幸せ。

ところでみなさん、花は咲きましたか？しっかりと実らせたら、さあみんなで種を蒔きにいきましょう。

『マザー・テレサ 祈りの家』

高崎教会牧師 塚本潤一

今年、二回目のバングラデシュ・スタディツアーに参加させていただきました。今年は九年ぶりの大洪水で、国土の60%が冠水し、600人以上の犠牲者の出る非常事態の中にあつたので、心苦しい訪問となりました。それでもBDP-ACEFのスタッフが知恵を絞って、さまざまな追加プログラムを考えて下さり、それが結果的に「じっくり、とことん、悩もう！プーバイル！」となったことに感謝いたします。また自分の体調不良のため、多くの方々にご迷惑をおかけしたことを、心からおわびいたします。そのような中で、最も私の心に残ったのは、「マザー・テレサ 祈りの家」への訪問でした。そこは、知的障がいを持っておられる58名の女性たちが入居しておられる、カトリックの施設です。渡し船で大きな河を渡った向こう岸の、特別な静寂の中に、「祈りの家」はありました。

遠くから多くの人が「何かを唱えている」ような声が聞こえます。入り口にはいると、シスターが出迎えてくださいました。「ようこそ。彼女たちは、とてもお客さまが好きなんですよ。」とのこと。「彼女たちは何をなさっているのですか？」と尋ねると、「一日中お祈りをしているのです。世界中の人々のために、そして世界の平和のために。」という答が返ってきました。

中に入ると、女性たちが祈りの本を手に、廊下にぎっしりと座っておられます。「どうぞ中に」というシスターの声に、一瞬足がすくんでしまった私たち。しかし高崎和子さんが突然一人の女性とハグを始めました。すると58名の女性たちは、次々と歓迎のために立ち上がり、暖かいハグを交わして下さったのです。うち解けてくると、一緒に歌ったり踊ったりと、とても楽しい時を持つことができました。

この「祈りの家」のスタッフは、4名のシスターと4名のお世話係のみ。一日二回の投薬以外は自由時間になります。みんなが好き勝手にしていると、抜け出す方もおられるので、考えられたのが一緒に「お祈りする」ことでした。自分たちのためにではなく、他者のために。そして世界中の人々のために……。

最初は、他に過ごし方はないのだろうか、と気の毒に思いました。しかし、そのお祈りを聞いているうちに、何となく心慰められ、穏やかになっていく自分を感じました。世の中の誰が見捨てても、彼女たちだけは「わたし」のために祈り続けてくださっている。そう思うと、とても彼女たちの存在がいとおしくなり、また「なくてはならない」存在のように思えてきました。

今、バングラデシュのキリスト教は、教育・社会福祉の分野で仕えていこうとされています。しかし、「祈りの家」のような施設は、全国でもここ一箇所だけです。多くの方々が、ここへの入居を希望して、順番を待っておられます。もっとこの祈りの輪が広がれば、と願いつつ「祈りの家」を後にしました。

「マザー・テレサ祈りの家」から、今日も祈りの声が聞こえてきます。世界中の一人一人のために、世界の平和のために。そして「あなた」のために。

バングラに学びなおす

青山学院女子短大教員 齊藤修三

バングラデシュは、ぼくにとって初めてのアジアだった。写真を見るたびに数々のシーンがその時々感情を伴ってあざやかに蘇ってくる。

首都ダッカの郊外にプーバイル地区はある。牛や山羊や鶏や野良犬が我が物顔にたむろする畦道^{あぜみち}を、裸足の子どもたちが駆け抜けると、汗に混じって干し草の匂いがする。「アジアの交差点」とぼくらが呼んだ市場の十字路。その喧騒は、まるでダッカのカオスがここまで及ぶかのようだ。力車とバイクと乗り合いバスとトラックが絶えず警笛を鳴らし合い、行き交う人の群れは薄紫の排気ガスと粉塵にまみれる。その周囲には、灼熱の陽を浴び、点在する熱帯樹林をぬって、なかば冠水した田畑が遠くまで広がっていた。

すべてが目新しい風景なのに、それでいて、どこかなつかしい…。既視感^{デジャブ}にも似た印象は、自分が生まれる前の、戦前の日本を無意識に重ねていたせいだろうか。

思えば戦後、日本はアメリカを模範とすることで物質的な豊かさを実現した。だがその結果、豊かさを人格と混同するという、金持ちにのみ好都合な俗物的価値観^{スノビッシュな}に洗脳されてしまった。問題は、これとセットで内面化される貧困観である。社会の歪みに貧困の原因を探す批判精神が育たないまま、「自己責任」よろしくもっぱら個人の悪とみなし、貧困者や弱者を劣等者として忌み嫌う傾向は、ホームレスに対する暴力があとを絶たない近年ますます強まっている。強者の価値観に同化され、モノの豊かさや快適さを競い合ううちに、「足るを知る」本当の豊かさを忘れ、貧困を怖れては文明という温室の中でしか生きられなくなるほどに、この国はひ弱になってしまった。

バングラはちがった。貧しくても、いや貧しいからこそたくましく、ときに図太く、そしてやさしい。物乞いの子どももホームレスも自分を恥じず、社会の中で「見える」存在として自分を主張^{カミングアウト}する。それを受け入れ、共に苦境を生き抜こうとする人々の気概は、どうみても貧困が人ではなく、国際社会の構造的欠陥に由来することを雄弁に物語っていた。ぼくは苦い現実をあらためて突きつけられた。貧困はもはや個人の不幸でもなければ、国民性の次元でもない。問題は、植民地支配から現在の多国籍企業にいたる数百年のあいだ、富を奪っては温室に自閉してきた先進諸国の側にある。バングラに見る、惑星規模の社会不正を正す責任は、貧しさに背を向けてきたぼくたち「北」の住人一人一人にある、と。

いま、貧困をばらまくグローバル世界のあちこちで、日本とちがい強者になびかず、かといってナショナリズムや原理主義のように対抗的に虚勢を張るのでもなく、社会の底辺で貧困を怖れずに声を挙げて闘う名もなき人々の、国境を越えて連帯する草の根のネットワークが生まれつつある。「ありえたかもしれない日本の姿」を未来に向けて学び直すためにも、屈託のない笑顔を見せて懸命に学ぶバングラの子どもたちを応援したい。

「わたしたちは人に影響を与える存在であることに無自覚すぎる。とくに子供たちに対して。」これは先日、何気なく読んでいた推理小説の一節で、わたしたちとは教員のことです。ラップアップディスカッションにて、撮りまくった600枚の写真より、写真にできなかった街の音、風、色、匂い、そして人の温かさを忘れないでいたい、と話したのがつい2週間前のことなのに、帰国後すぐに仕事に忙殺される日々、ちょっと息抜きをしたい時に、撮ってきた写真をぼーっと眺めては癒されている毎日です。帰国後何ができるかを考えなきゃ、何かをしなくちゃ、コマを回し続けなくてはいけないはずなのに、このような状態です。

教員としてスタディーツアーに参加し、BDP スクールの見学中、私は生徒の目の輝きに感心していましたが、それより先生達の生徒に向ける眼差しに深く興味を持って観察していました。生徒参加型の授業、よく言葉はわからないけれど、頻繁に褒めている印象を受けました。何より教えている先生たち自身が温かく、とても楽しそうでした。入ったクラス毎、今は何を教えている授業なのかを推測し、生徒と先生を見ながら自然と自分も楽しくなり、自分の時間が与えられたら何をしようか、できることならその授業内容の延長線で、と考えている自分に、つくづく自分は先生なのだなぁ、と思いました。そう、この職業は素晴らしい仕事で有り得るのだ、とバングラデシュの先生達を見て初めて思いました。余談ですが、最初のクラスでは歌の苦手な私はしっかり固まりました。何回目からは交流するのが楽しくて楽しくて仕方がなくなりましたが。

先生たちは、字の読めない小さな生徒達に、楽しく歌を歌うかのようにベンガル語を教えたり、体全体を使うゲームを交えながら生徒に英語を使わせていたり、ろうそくと地球儀を使いながら地球の自転を教えていたり、竹の棒や石を使って足し算を教えたりしていました。生徒たちの目を見ていればどれくらい授業に集中しているのかわかります。諸事情により、何年学校に通えるかわからないけれど、もしかしたら小学校しか通えない子供もたくさんいるけれど、この子供達は読み書きができるだけでなく、一生、楽しかった学校の思い出と共に生きていくのだと思います。親の他に頼れる大人の存在であり、知識を得ることの楽しさを、そして知識を得て働くことの充実さを教えているのです。まだまだ自分は駆け出しで、失敗の連続ですが、この仕事の大切さを忘れず元気に生徒と接していきたい、という気にさせられました。

今夏、洪水の被害者が多数出ており、その中には子供も、そして親を失った子供もたくさんいて、その子供たちにも救いがあることを願って止みません。スタディーツアー中、私達は常にスタッフに守られ、野菜などの値段が高騰しているのにも関わらず、食べ物にも不自由することなく、有意義な時間を過ごさせていただきました。地図上でしか知らなかった国に興味を持たせてもらったことに感謝をしています。そしてバングラデシュは私にとって気になる国になりました。私のコマの回転の速さは早くなったり遅くなったりすることでしょう、でも完全に止まることはないような気がします、それでもいいのかな、と今は思っています。私には国際協力の第一線に立ち、どこかの国の戦争や紛争を止めたり、飢えている人々に食糧や物資を運ぶことはひとまずないでしょう、でもこの職業に就いているからこそ、媒体でいることはできるだろうと思います。私に今できること、それは自分の職業がいかに生徒に影響力のある仕事であるかを自覚し、驕らず、ほんの少しだけ英語という教科を教え、残りは共感と共に生徒自らの成長を見守ることなのだと思います。往々にしてお節介な私には大きな課題ですがやってみようと思います。最後に、バングラデシュだけではなく、ツアーで2週間という時を異国にて共にしたツアー全員のことにも気になる存在になりました。細く長くつながっていったらいいな、と思います。ありがとう、そしてこれからもよろしくお願いします。

見て、感じて、体験する。知っているということ。

共愛学園中学・高校講師 関口 萌

アジアの最貧国バングラデシュ。どんなに貧しくて悲惨な状況があるのだろうと、そんな想いを胸に日本を出発しました。

ACEFのスタディーツアーのことは大学生の頃から知っていました。過去に友人が参加しており、その体験がいかに素晴らしいものであったかということも十分に聞いていたし、学校での生徒の発表や同僚の先生からの体験談もとても興味深いものでした。しかし、日本にいて得られるバングラデシュの情報は極端に少なく、行ってみたいとは思いつつも、未知の国で2週間を過ごすということは私にとって大きな決断でした。

初日のオリエンテーションでアルバイトさんが「たくさんの選択肢がある中で、バングラデシュを選んで来てくれた事を嬉しく思う」とおっしゃっていました。「理解することは愛することの始まりです」とのメッセージにどんな2週間になるんだろうとわくわくしたのを覚えています。

2週間でたくさんの人に出会い、多くのことを感じ、たくさんの優しさを受け、多くのことを経験してきました。物乞いをする子供たちとの出会い、村の子供たちとの和やかな時間、学校が楽しくて一生懸命勉強している子供達、熱心に教えている女性教師達との出会い。ホームステイを受け入れてくれたホストファミリー。BDPスタッフと過ごした多くの時間。家族を交えた暖かい歓迎。ひとつひとつが、今、素敵な思い出として残っています。

バングラデシュと日本。2カ国の間にはたくさんの違いがあります。でもそれ以上に似ているところ、共通点もたくさんあるなぁと感じる事ができました。それが今回のスタディーツアーに参加して気づいたことであり、私にとって嬉しい発見でした。貧しさに喘いでいる可哀想な国ではなく、貧しさゆえに伸びていく力を秘めた魅力溢れる国。人々はよく働き、友好的で明るく「生きてる」って感じがしました。

もちろん私たちがいた環境はとても安全で守られたところ。バングラデシュの生活のほんの一部しか見ていないと思います。BDPスタッフの献身的なサポートのお陰で、2週間不便な思いをすることもなく、楽しく素敵な時間を過ごす事ができました。それも手伝って、今、私にとってバングラデシュはとても身近な国になりました。そして、素敵な人たちが集まっている大好きな国のために、自分には何ができるだろうと考えているところです。

最初は行くのが不安だった遠く離れた国、バングラデシュ。今では未知の国じゃない。なんだか懐かしいような心が落ち着く素敵な空間、知っている人がたくさんいるいとしい国。これから先、バングラデシュがどのように発展していくのか楽しみです。3年後、5年後どうなっているのだろう？と。2015年、その頃には教育も100%全員が受けられるようになっていたらいいなと思います。日本からバングラデシュへの想いを馳せ、いつかまたバングラデシュを訪問できたらと思います。

今回のこの経験を自分の中で活かしていくのと同時に、たくさんの周りの人たちとも共有していきたいと考えています。多くの人にバングラデシュという国のこと、人々の素晴らしさを伝えていきたい。自分にできることは小さいけど、まずはできることから。そして、バングラデシュが、他の人にとっても興味深い国となり、訪問を通して「知っている身近な国」になっていったら・・・と思います。理解することは愛すること。そのお手伝いができたらいいなと思っています。

バングラデシュを思いながら生きる

フェリス女学院中高教諭 徳田有希子

今回、このスタディーツアーに参加したのは、まず、バングラデシュは日本と大きく異なる国だろうから、バングラの価値観を直接見て感じたい、それから何より、バングラに友達を作りたいという理由からでした。結果的にツアーでは、この両方が大いに満たされました。

バングラデシュで出会うものは、すべてが驚きの連続でした。気温と湿気の高さに始まり、カレーのおいしさ、シンプルな生活、町でお金を求めてくる人、バスの上に乗車する人や、走る列車の上を駆け抜ける少年たち、車やリキシャのアグレッシブな運転、ごちゃごちゃした町並み、夕日の雄大さ、道端の牛や山羊、歌や踊りの上手さ、人の温かさ。それから、国を愛する気持ちや人をもてなす心、キラキラした瞳に優しい笑顔。見物に行った私たちを本気で見物してくる人々。厳しい貧困という現実に向き合うことは多々ありましたが、それ以上に、初めて訪れたバングラデシュは日本にはないものがたくさんあって、私にとって魅力的でした。

けれども逆に、こんな漠然とした考えを立ち止まって考えさせられたのは、ホームステイ先の大学生に「バングラはこれからどうなるべきか?」と尋ねられた時のことでした。私が見ていたバングラと、バングラの問題に頭を悩ませ、焦りつつ本気でこの国を良くしようとしている人たちが見えていたバングラとの間にギャップを感じ、のほほんと現れ、しかも自分の国の魅力もバングラへの指針も満足に語れない自分を浅はかで恥ずかしいと感じたのです。

そこで、これからは、バングラの良いところばかりに目をつけてうらやましいと感じるのではなくて、この国が抱える問題をきちんと理解する必要があると思いました。しかも、目の前に見える問題にただ感情的にとらえるのではなく、もっと構造的に、世の中の誤った不平等な仕組みを知っていかなくてはいけないと思いました。それができてこそ、初めて人にバングラのことを正しく伝えることができるし、バングラをきっかけに、色んな問題を理解していくことができるのではないかと考えました。

このツアーの何よりの収穫は、バングラデシュで多くの人々と出会えたこと。ツアーのメンバーに出会えたこと。これから先、平和について考える時、バングラで出会った人たちのことを具体的に想像すると思います。見物対象や研究対象ではなくて、実際に心を触れ合わせた友人として、愛すべき対象として、何度も何度も思い出し、ずっとずっと祈り続けていければ幸せだと思います。「バングラを思いながら生きる」という言葉が今、強く自分に迫っているのを感じます。

洪水で大変な状況の中、バングラへ行けるだけでもありがたいのに、身に余るほどのもてなしを受けました。BDP や ACEF のスタッフの方々をはじめ、このツアーに関わるすべての人に感謝でいっぱいです。また参加しますっ!

バングラデシュの魅力

国際基督教大学 3年 渡邊さかえ

今回のツアーでは洪水の影響により農村部には行けませんでした。それは悲しいことだとはじめは思いました。しかし、農村行きがキャンセルされた分スケジュールは大幅に変わり、high school や college も訪問できたし、独立記念塔へ行ったり、ホームステイもすることができました。一つの場所でじっくりいろいろな経験ができて良かったです。また、何人もの BDP スタッフのおうちを訪問する機会も与えられました。急なプログラムの変更にも迅速に対応してくださった BDP スタッフの皆さんには感謝してもきれない思いです。

私は個人的にホームステイできたことがとても良かったと思っています。BDP スクールの先生のおうちに一晩泊めさせてもらったのですが、日本人が泊まりに来た！！ということで親戚中が家に集まってきて、夜は 20 人から 30 人くらいが部屋に集まって歌を歌ったり、お互いの言葉を教えあったり、冗談を言って笑いあってバングラデシュの国の人と直接じっくりと交流できたことがとてもうれしかったです。ホストファミリーはとて私たちを愛してくださって、「次に来た時は空港から直接我が家に来てね！」とまで言うてくれました。はじめからフレンドリーで温かくて親切で離れる時は寂しかったです。でも家を離れた後もカルチャーショーに来てくれたり、日本へ発つ日の朝に会いに来てくれたりして、深い愛を感じました。

バングラデシュで出会った多くの人々が同じように温かくて愛にあふれていて親しみやすかったことは忘れずに記しておきたいです。BDP スタッフ、訪問した各学校の生徒、先生、オフィスの近くに住む子供たち、その他いろいろな場所で出会ったすべての人々が温かい素敵な人たちでした。笑顔が輝いていきいきしていました。これこそがバングラデシュの魅力だと思います。この地に住む人々の良さはそのままに発展を遂げていけたらいいと思いました。

バングラデシュで遊んだ子供たちの夢が叶えられるように、輝いて生涯過ごせるように、ずっと笑顔で暮らせるように、私はこれからもっと様々なことを学んで自分の能力を最大限に活用して彼らに少しでも役立てる働きをしたいです。バングラデシュに行ったことは自分にとっていい経験になった、とそこで終わりにしてしまったら何の意味もありません。自分が如何に恵まれた環境で生きてきたかを知ったのだから、神様から与えられた賜物を生かし、それを還元していけるように私はもっと精進していきたいと思いました。

最後にこのツアーを通して出会えたすべての人に感謝します。本当にありがとうございました。

「どんなことにも感謝しなさい」

国際基督教大学2年 面川 麻理

貧困問題や開発、国際協力に大きな興味を抱く中で、実際に発展途上国に行ってみたいと思った私が ACEF のバングラデシュスタディーツアーを選んだ理由は、「最貧国」と定義されるバングラデシュで日々の礼拝やシェアリング等をもつことで、深い「学び」があると思ったこと、その「学び」を通して自分の生き方や、大学での専攻や就職などの進路を考えたかったこと、そして、キリスト教の文脈の中で過ごす2週間は、まだ洗礼を受けていない自分にとって信仰を深めるきっかけになるのではないかと思ったからである。このような今から考えれば少し偏狭で堅苦しい意思をもってバングラデシュに飛び立った私を待っていたのは、暑くて湿ったバングラデシュの大地、便利とはほど遠いかもしれないが地に足がついた質素で豊かな生活、目をきらきら輝かせ何も疑わず心身ともに飛び込んでくる子ども達や温かいホスピタリティーの心をもち生きる力にみなぎるバングラデシュ人との出会い、そして予想もしなかった、まさに人生において大きな意味を持つこととなった病気である。予防接種もばっちり済ませ、この2週間心と体でバングラデシュを吸収しようと意気込んでいた私にとって、高熱が続いた挙げ句入院し、退院しても体調が優れず食べ物を食べたくても食べられない日々が続いたことは、一見マイナスのことであるように感じた。暑い中なかなか熱が下がらず心身ともに弱り、「何をしにバングラデシュに来たのだろうか?」「どうして熱があるんだろう、下がらないんだろう」という悔しい思い。退院しても食べられないことの精神的、身体的辛さ。ご飯を作っていた方達への申し訳なさ。しかし、そんな私を温かく支え見守ってくれたメンバー、様々な面で助けていただいた BDP のスタッフには本当に本当にお世話になった。様々な人が与えてくれた愛に、私は生かされているんだという気持ち、そしてあふれんばかりの感謝の気持ちでいっぱいになった。メンバーの大丈夫?という声、会話には何度も救われる思いがしたし、たくさんの人からもらった、日本から持って来た食べ物でまさに生き延びていた時もあった。入院につき添い全面的に支えてくれた儀子さんには本当に心身ともに自分をさらけ出し、いろんな場面で助けてもらった。熱が下がらず子どものように泣き続ける私に“Mari, don't worry. You are my brother. I will help you so don't worry.”と話してくれた Faruk さんからはバングラデシュ人のホスピタリティーを知った。高熱でふらふらの中まるで娘のように接し、体を拭いてくれた炊事担当のナズマさんにはドンノバッドと言い続けることしかできなかった。迷惑をかけた人々にお返しができないか考えていると言った私に、愛は give and take じゃないんだ、君はもらった愛を他の人に返せばいいんだよと熱をこめて話してくれたアルバート氏には与えられる愛を純粋に受け止め、感謝し、そして自分も愛を実行することで愛の連鎖をつないでいくことを教えてもらった。経済的に貧しい国とされるバングラデシュでの日々には、愛があふれていた、心が豊かだった。私のこのツアーでの一番の「学び」は愛することと日々何事にも感謝することの大切さ、バングラデシュ人の心の温かさ、病める日々にかそ人からの愛を純粋に感じ感謝することができるということ、心を低くし心を広くすることの大事さである。私は確かに大変な思いをしたのかもしれないが、それは神様からの大きな恵みであり気付きの時であったのだと、帰国した今思う。その一方で、バングラデシュにあった精神的な豊かさに、そもそも貧困とは何であるのかを考えさせられつつも、学校に行けない子ども達、物乞いの子ども達の存在を目にし、やはりどうしようもない貧困は確実にあるのだということを感じさせられた。そしてこの問題の背景や解決方法を模索するために、勉学に邁進していきたいと思った。このスタディーツアーが与えてくれたものは、私の期待上のものばかりであった。

最後に、このスタディーツアーに送り出してくれた家族、共に2週間を過ごしたメンバー、BDP のスタッフ、出会ったたくさんのバングラデシュの人々、そして神様に感謝の気持ちを表したいです。ありがとうございました。

たからもの

東京女子大1年 阿部 遥

バングラデシュで一番楽しくて心に残ったことは、子供たちと遊んだことです。帰ってきて数日たった今、その子供たちのことばかり思い出します。カッコいいけどかわいいアシュラフ、常に私たちがオフィスから出てくるのをうかがっているシラム、兄思いなファシーナ、弟のアカシを溺愛しているファーハッド、すぐにいじけるアドゥーディー、不思議ちゃんアーロンとガチャピン似の弟、ホームステイ先のオルナ、などなど。みんなすごいかわいかったです、そしてすごい優しかったです。

バングラデシュでの日々は一言でまとめるとしたら「楽しかった」になりますが、私たちが楽しんでいるすぐ隣で辛い状況にいる人たちがいることを感じました。すぐ近くに学校があるのに行けない子はどんな気持ちだろうか、自分の名前を書けない気持ちはどんなだろう、など考えさせられました。また、今年は洪水がひどく農村地域に行けず、プーバイルでも学校に来られない生徒がいました。少し離れたところでは洪水によって家を失ったり病気になったり亡くなった人がいたでしょう、そのような状況の人々は一体今どうしているのでしょうか。もっとバングラデシュの人々の生活を知りたいと思うようになりました。

そして悲しいことがあったときでも教わったことがありました。外で子供と遊んでいる時、なぜだったのかはわからないけれども大人に虐められる子供を見て、私が泣いているとディコさんがやって来て笑わせてくれました。悲しい時だから笑う、ということが、場合によるかもしれないけれど、どんなに救いになることか教わりました。そしてそういうときに人を笑わせられるディコさんはすごいです。因みにディコさんの事しかここにはページの都合上書けません。他のスタッフとのエピソードもたくさんあり、みなさんいろいろとすごかったです…。

私は今回のSTで自分の弱さを痛感しました。環境の変化によってダウンしてしまったこともそうですが、団体生活の中で自分の機嫌のコントロールが全然できないことを知りました。皆さんにはたくさん気を使っていたのに自分からはそれを返すことができなくて、悔しいやら申し訳ないやらでいっぱいです。皆さん優しくいい人ばかりで、こんなにいい人たちに囲まれて2週間を過ごせたことに本当に感謝しています。

今、日本にいても私に出来ることは小さく、直接的には私が出会った子供たちの手助けをすることは難しいと思います。近所の子に持っていた鉛筆をあげたとき、本当に嬉しそうに目を輝かせたのを思い出して、もっとあげてくれればよかったと後悔しちゃったりします。しかし、今できることをちゃんとやるのが私の役目なのだと思います。

念願のバングラデシュに行ってきた。私にとっては初めての海外であり、もちろん不安と戸惑いもあったが、それよりも期待と興奮でいっぱいだったと思う。そして実際行ってみてあじわった感動はまさに壮大だった。目で見るバングラの景色、耳で聞こえる歌や太鼓の音、鼻で感じるその土地のにおいや空気、舌で味わうカレーの味、手で触るご飯の熱さ、全てが新しく、全てが発見でどんなことにも興味をもち、私の脳みそはフル回転していた。世界はひとつ～とどこかの歌の歌詞にあるが、世界はひとつでも国の中はこんなにも違うものなんだと分かった。もちろん以前からどの国にもそれぞれの文化があり、言葉があり、生活があると分かっていたし学校でもそう学んできた。しかし学校で違いを学ぶのと、実際現地に行って五感で違いを味わうのでは月とすっぽんの差である。バングラはすごかった。空港に着いた瞬間から私の電波はビンビンだったと思う。きっとツアーのみんなもそうだっただろう。

空港で迎えてくれたのは愛するBDPスタッフのみなさんと、高温多湿の世界と、2人の少年だった。準備会の時から物乞いの人がいることは聞いていたし、彼らに何かを渡すのは良くないことも分かっていた。しかし話で聞くのとは違い、彼らは実際に自分の目の前にいるのだ。深夜一時を過ぎていたにもかかわらず、あんなに小さい子があんなに悲しそうな顔をして物乞いをしてくる。私はとてもショックだった。何もしてあげられない自分が悔しくて、見ていることしかできないのがあまりにも無力だと感じた。ツアーをする中で物乞いをしてくる人は少なからずいたように思う。そのたびに自分の無力さに悩んでいた。けれどシェアリングをする中でその問題はみんなが抱えていたことだと分かり、そんな場面に出くわしても、規則の中の正しい行動が答えなのではないとすることができた。自分で感じて発見することもあれば、いろんな人と共に発見を分かち合えることもできるということが嬉しかった。

また、私はバングラへ行く目的として人との触れ合いをしたいと思っていた。そしてツアーの中で私は思ったよりももっと多くの人と触れ合うことができたと思う。小学校の子供たちは歌と踊りを披露してくれた。道行く人は、素敵な笑顔で手を振ってくれた。BDPのスタッフさんたちは車の送迎から、お買物の値段交渉、体の調子まで気を使ってくれた。またキッチンスタッフの奥様方は、2週間家にも帰らずに、毎日のご飯と身の回りの火事をこなしてくれた。みんなが本当の家族のように優しく暖かかった。

バングラは世界的基準から言えば貧しいのかもしれない。確かに小学校に入れなくて仕事をする子も、安い賃金で暑い中リキシャをこぐひともいる。体に障害をもっていて道端で物乞いをしなければ生きられない人もいる。けれど彼らは毎日を生懸命生きているのだ。お金を稼ぐため、愛する家族のため、生きるために頑張っているのだ。日本は世界的基準から言えば豊かなのかもしれない。しかしバングラのように生きることにあんなに輝きをもっている人はそんなに多いとは思わない。私たち、先進国に生きる者も、彼らから学ぶべきことは多くあると思う。現に私がこのツアーで強く思ったのは、バングラのみんなから日々与えられたものはものは大きく、私は小さいということだ。私毎日たくさんのことをしてもらって、愛する仲間と一緒に笑うことができた。もちろん衝撃的な事実も貧困の現実もあったが、こうしてあらためて思い起こすと、1つ1つの事柄が、実に充実していたと思う。ここで学んだことを決して忘れたくないし、いろんな人にこの感動を伝えたいと思う。そしてなにより大切なポンドウ(友達)と会えたことを心から嬉しく思う

頑張ります

東奥義塾高校 2年 木村 鴻介

僕にとってバングラデシュが初めての海外でした。興味が無いわけではなく、何度も行けるチャンスはあったのですが、本気で行きたいと思ったのは今回が初めてでした。

そんなバングラデシュにいる間は毎日が貴重な体験でした。またすごい居心地の良さまで感じていました。初めて会った僕達を心から歓迎してくださった BDP のスタッフやその家族の方々。日本に帰ってから写真を毎日見ながら思い出に浸っています。また、帰ってきてから強く思うのが、日本をもっと知っていく必要があるということです。バングラデシュのことを考えているとすごく楽しい気持ちになると同時に、日本のことを否定する考えが生まれてきてしまいます。それは日本のことを知らないからだと思います。バングラデシュ人としてバングラデシュを知り、愛するのと同じように、日本人として愛国心を持っていこうと思います。それと同時に、先進国である日本に住んでいる人として、何かできることがないのかを考え、実行し、また伝えていくべきだと思います。バングラデシュという国名すら知らない人の頭に少しでもこの国のことが印象に残せればいいです。

僕は BDP のスタッフと二つ約束をしました。1つ目に、バングラデシュという国があること、また一緒に遊んだ子供たち、そして2週間生活を共にした BDP のスタッフがいることを忘れないで、と。そして2つ目に、僕達が来たことに意味があり、さらにまた来ることにもっと意味がある。だから3年後に必ず来てください、という内容です。何があってもバングラデシュのことを忘れることは無いです。それに3年後かどうかはわかりませんが、また機会があれば行きたいと思っています。

最後に、2週間で感じ取ってきたこと、ものを無駄にせず、さらに共に過ごしたメンバーに感謝したいと思います。

一期一会

山梨英和高等学校2年 寺田来未

今、バングラデシュで過ごした2週間を振り返ってみると、それは自分の人生において本当に大切な、かけがえのない思い出や人との出会いに満ち溢れた、すごく温かいものだったなあ、と思います。本当に、いろいろなものを見た2週間でした。

バングラデシュの人たちの、子どものような魅力も、温かさも陽気さも、まっすぐさも知りました。私と同じ高校生の、責任感を持った必死な頑張りも、強く感じました。ダッカに行って、顔の変形したような子が、ワゴンの窓から私たちに、ずっと何かを訴えていました。少年が、渋滞でゆっくり走るワゴンの窓を掴んで、ずっと必死についてきました。小さな、表情のない子たちが、駆け寄って手を差し出してきました。何もできずに行こうとしたら、必死に私の足にしがみついてきました。小さな子が手を差し出してきて、同じ目線になって笑いかけたら、悲しそうな顔から恥ずかしそうな笑顔に変わりました。最後のカルチャーショーの時、みんなで歌って踊った時の、スタッフさん、メンバーみんなの充実感に溢れた、心からの笑顔もきっと一生忘れません。

バングラデシュと日本は、やっぱり全然違います。人の必死さも、頑張りも、温かさも、街も生活も想いも、何もかもが違いました。

日本人はみんな私自身、何かにもがいているように思えます。自分自身、というものを、とにかくわかって認めてほしくて、一見そうは見えないようにくだらない話をして笑いながら、必死にかっこつけています。

バングラデシュで私が出会った人たちはもっと、人間として原点にあるような感じがしました。他人からどう思われるか、とか思われたいか、とか、そういうことよりも、もっとすぐありのままで、壁を全くつくらなくて、むこうがあまりにも素直でまっすぐ向き合ってくるから、自分も自然にありのままで向き合える、そういう関係性がバングラデシュには沢山あって、それがすごく温かかったんだなあ、と、今思います。

メンバーとの関係も、自分にとってすごく貴重なものでした。このツアーに参加していなければ決して会うことのなかったような人たちと出会い、1人の時間なんて全くないような生活の中で、一緒にいろんな経験をして、語り合っ、少しずつお互いのことを理解して、一緒に食事をしたり、おはようとかおやすみを言い合ったり、並んで洗濯をしたり、そういうことを通して、まるでメンバーやスタッフさんみんなが、いつのまにか自分にとって、1つの家族のように思っていました。

バングラデシュでの2週間は本当に毎日が刺激的で、いろんなことを感じたけど、やっぱり何よりも、いろんな人との出会いがあったからこそ最高の旅であったと思います。

大好きなメンバーやスタッフさん1人1人、学校を訪問して出会った1人1人、いつも一緒に遊んでいた子どもたち1人1人、そして物乞いの子たち1人1人、その1つ1つの出会いが、私にとって本当にかげがえなくて、意味のあるものだと思うから、1人1人から教わったこと、感じた気持ちを絶対に忘れないで、無駄にしないで、これから先精一杯生きていきたいと、強く思います。

アミクーブクシ!

共愛学園高校 2年 村本千尋

今回このスタディーツアーに参加しとても濃い2週間を過ごせたと思います。
私は最初バングラデシュについてあまりよく知りませんでした。しかしこのスタディーツアーに参加しバングラデシュが凄く身近な国になりました。

バングラデシュの人々は本当に優しくて明るくて思いやりのある人々ばかりでした。一緒にいて自然と自分まで笑顔になれ気持ちもとても気持ち良かったです。その中でも今回出会えた子供達は本当に素直で元気で可愛いくて大好きです。最初は言葉がわからずどうコミュニケーションを取っていいかわからず大変でしたが、歌やダンスと一緒に楽しく何かをしている時の笑顔で何となくコミュニケーションがとれてた気がします。確かに言葉は本当大事だと思いますが、言葉にできなくても心で分かりあえるものもあるんだなと感じる事ができました。《わかりたい!!!》と《わかってほしい!!!》の気持ちがあればコミュニケーションはとれると思いました!!
でももっと英語は勉強します・・・(泣)

そしてバングラデシュの豊かな大自然。木はたくさんあり動物がたくさん自由に歩いていた。空は本当に青くて夜空はとても綺麗で癒されました。この風景は次行くときまでずう～～とあのままであってほしいです。

最後に洪水で計画通りに進む事はできず大変だったと思いますが、私はとても貴重な経験・時間を過ごさせてもらえた感謝の気持ちでいっぱいです。スタッフさん・中川さん・のりこさん、本当にありがとうございました。2週間を共に過ごせたメンバー大好きです!色々な事を教えてくれたバングラデシュももっともっと大好きです!ありがとうございました!!

バングラデシュと出会って

山梨英和高等学校1年 中込久美子

わたしはバングラデシュの寺子屋スタディーツアーで本当に貴重な経験をさせて頂きました。日本に帰国した今、学校へ向かう電車の中や授業中、ふと気がつくとバングラデシュのことばかり考えています。わたしたちを見て物乞いに来た人々の顔、かわいい笑顔で話しかけてくれた子どもたちの顔、わたしはそれを思い出す度に、本当にバングラデシュに行ったら良かったと思います。わたしはバングラデシュで本当にたくさんの人と出会い、時には大きな衝撃を受け、そして時には人の心の温かみを肌で実感することができました。

短い2週間でしたが、この2週間は大げさではなく、わたしが生きてきたたったの15年間ではありますが、その中でいちばん充実し、考えさせられることの多かった2週間でした。わたしが今回見たバングラデシュはほんの一部です。そしてそのほとんどが良い面ばかりだったのかもしれませんが。しかしわたしは、バングラデシュという国に、そしてそこに住む人々に、本当に魅せられてしまいました。

スタディーツアー自体は終わってしまいましたが、わたしにとってこれは終わりではなく、もっとバングラデシュを知るための、一人でも多くの人にバングラデシュのことを伝えるためのスタートです。『バングラデシュは楽しかった』だけで終わらせるのではなく、コマが回り続けるように、そして今回感じたこと、考えたことがわたしの中で花を咲かせ、いつかその種を人に蒔けるように努力し続けたいと思います。

第33回(2007夏)ACEFスタディーツアー参加者

Aチーム

1	中川 英明	NAKAGAWA HIDEAKI	男	ACEF事務局長	ICU教会
2	山口 旬	YAMAGUCHI JUN	男	横須賀学院小学校教諭	霊南坂教会
3	佐々木 治菜	SASAKI HARUNA	女	東奥義塾高校教諭	
4	関口 萌	SEKIGUCHI MOE	女	共愛学園中高講師	セントラルバプテスト教会
5	渡邊 さかえ	WATANABE SAKAE	女	ICU社会科学科3年	東京ホライズンチャペル
6	阿部 遥	ABE HARUKA	女	東京女子大地域文化学科1年	
7	木村 鴻介	KIMURA KOSUKE	男	東奥義塾高校2年	
8	村本 千尋	MURAMOTO CHIHIRO	女	共愛学園高校2年	
9	寺田 来未	TERADA KURUMI	女	山梨英和高校	

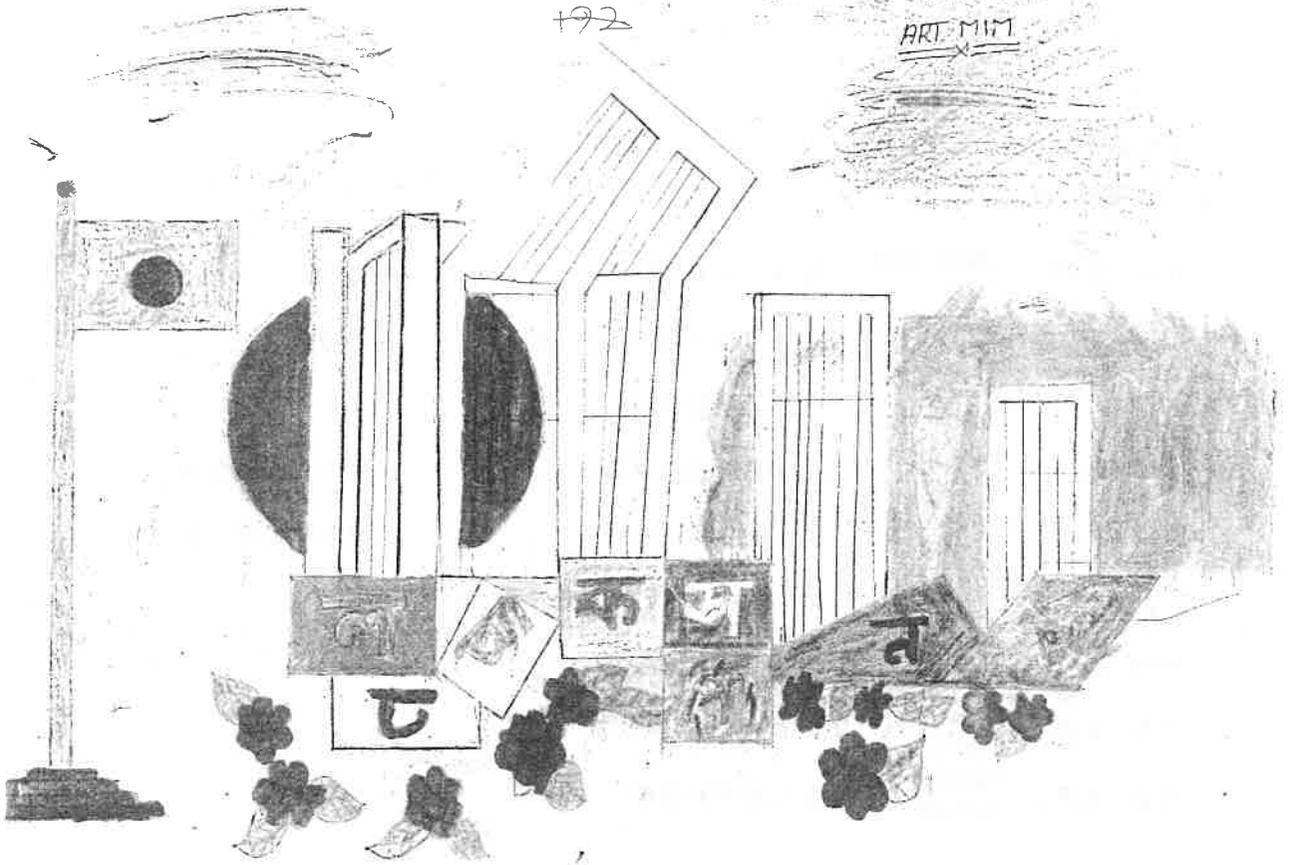
Bチーム

1	井上 儀子	INOUE NORIKO	女	ACEF事務局	浦和東教会
2	高崎 和子	TAKASAKI KAZUKO	女	ACEFバザー委員	所沢みくに教会
3	塚本 潤一	TSUKAMOTO JUNICHI	男	牧師	高崎教会
4	斉藤 修三	SAITO SHUZO	男	青山学院女子短大英文学科教授	
5	徳田 有希子	TOKUDA YUKIKO	女	フェリス女学院中高教諭	神戸北教会
6	面川 麻理	OMOKAWA MARI	女	ICU国際関係学科2年	
7	大久保 恵頼	OKUBO YASUYO	女	東奥義塾高校3年	キリスト聖教団弘前富士見教会
8	中込 久美子	NAKAGOMI KUMIKO	女	山梨英和高校	

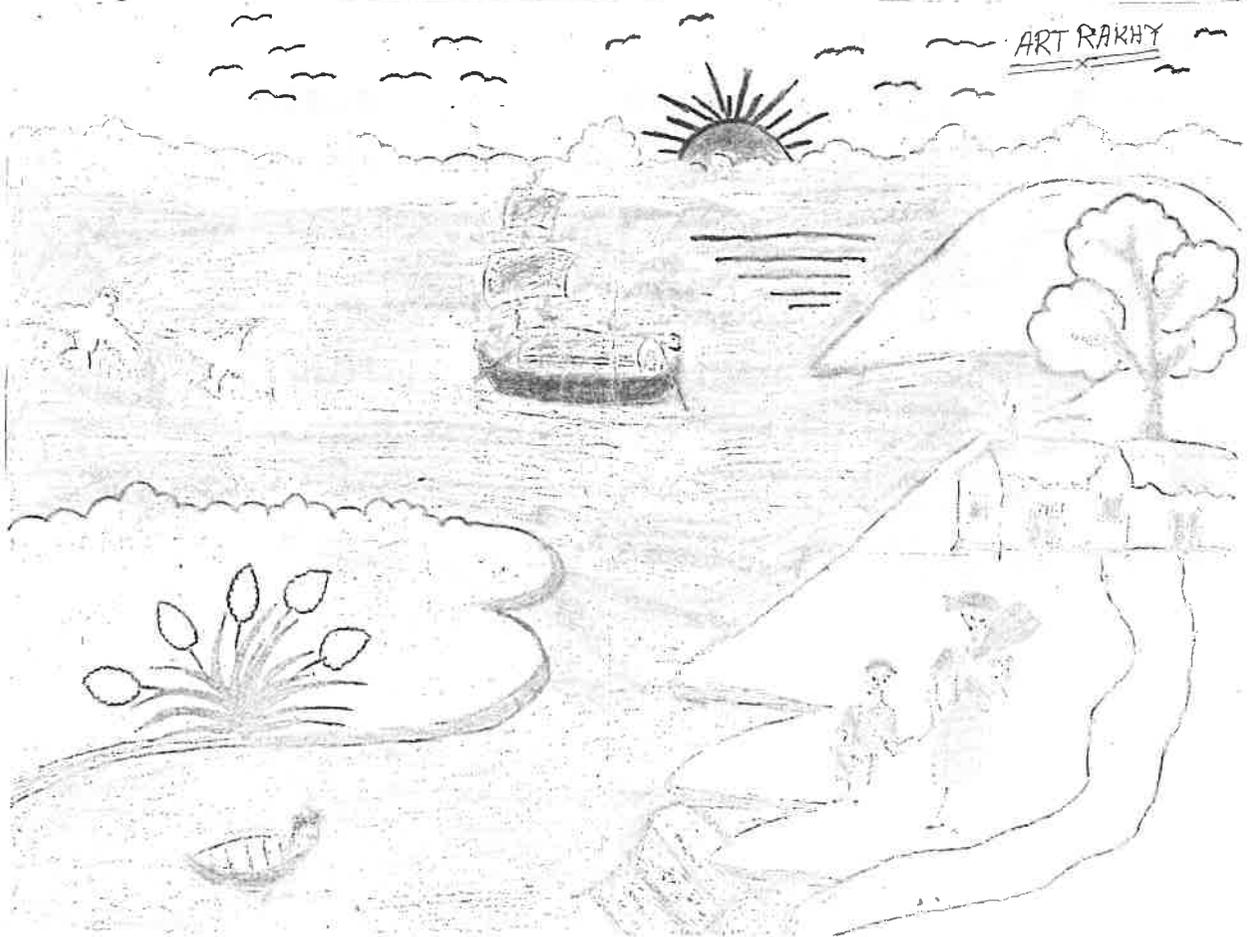
১৯২১
১৯২২

"SHAIK MINAR" Bangladeshi monument.

ART MIM



ART RAKHY



Bangladesh に寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。



会員募集

個人会員	年額 1口	5,000円
団体会員	年額 1口	50,000円
学生会員	年額 1口	2,000円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替 00100-0-185540
アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@acef.or.jp

http://www.acef.or.jp